俳諧故人續五百題

下

古人續五百題　秋之部目録

附候の部

名月	初丁	月見	二	名月西	一
そら月	三	三日月	二	待宵	三
后待月	四	龍田姫	五	文月	五
菜月	五	そら秋	五	七夕	六
銀河	六	かさてだの橋	六	頼ひの糸	六
芋名月	七	高灯籠	七	そうめん	七
鬼やらい	八	初冠	八	蓮飯	八
生身魂	九	盆の月	九	おぼこと	九
新火	十	残暑	十	さまうう	十
月と入	十一	おつき置	十一	捨てうち	十一
				初月ふい	十二
				月	三
				十六夜	四
				葉月	五
				立琴	六
				千度盆	七
				おそなへ火	七
				墓詣	八
				西瓜	九
				稲風	十

拙き為ものの雅

露 十二
稲妻 十三
木綿 九 十九
逆峯入 二十五
初むし 十六
鳴子 十七
蔦紅葉 十七
河鹿 十八
猪衣 十九
ちん酒 二十
秋の霜 廿一
植物の部

後の花入 十三
二十日 十三
早稲 十四
落穂 十四
晩稲 十五
司召 十五
ちん潮 十五
八朝 十五
放生会 十六
かゝし 十六
落し水 十七
渋柿 十七
岩茸 十八
鮠 十八
升市 十八
新そば 十八
漸寒 十九
朝そば 十九
夜寒 二十
霧の時雨 二十
秋の西 廿一
縄空 廿一
長き秋 廿一
移り暮 廿二

梶 廿二
葡萄 廿二
梨 廿三
若たかこと 廿三
一葉 廿三
柳散 廿三
草の花 廿四
女郎花 廿四
木槿 廿四
葛の葉 廿四
嵐尾竹 廿五
藤ちり花 廿五
夢珠ぶ花 廿五
男ゑし 廿五
あさゝ田 廿五
芙蓉 廿六
紫海棠 廿六
我木瓜 廿六
萩 廿六
荻 廿七
蕎麦花 廿七
稲のこな 廿七
番椒 廿七
糸瓜 廿八
ちゝ子の実 廿七
蓮の実 廿八
蘭 廿八
ちゝ子貝 廿八
桔梗 廿九
落 廿九
紫苑 廿九
野 廿九
ちりこき 三十
雞頭 三十
葉の花 三十
ぶきく 三十
稲 三十一
蘆穂 三十一
尾花 三十一
蓋 三十一
末枯 三十二
かしこ瓜 三十二
蔦 三十二
梅もどき 三十二
ねこと 三十三
河豚 三十三
刈萱 三十三

木犀 三十三
栗 三十四
虫 三十五
秋の蠅 三十六
蟀 三十六
いとゞ 三十八
蟋蟀 三十九
蛬 四十
帰燕 四十
鳩吹 四十一
冬近 四十二
小の實 三十三
熟柿 三十四
生類の部
秋蝉 三十五
蠅蛍 三十六
義士 三十七
蟷螂 三十八
小鳥 三十九
賜 四十
鴫 四十一
鹿笛 四十一
推の実 三十四
紅葉 三十四
草狩 三十五
秋の旅 三十六
秋蚊 三十六
松むし 三十六
鈴虫 三十六
蜻蛉 三十七
きりぎりす 三十七
蜩 三十八
雁 三十九
鶉 四十
鵲 四十一
鶉 四十一
行秋 四十二

百七十三題

古人續五百題 冬之部目録

降物之部

初雪 初十
霜 四
氷室 七
雪 二
霜夜 三
あられ 四
氷 七
雪車 七
みぞれ 一
あられ 五
凍 七
永柱 八
冬の晒 七

時候の部

神無月 八
冬至 九
達磨忌 十
小春 八
神おくり 九
年の内 十
八月 八
十夜 九
ひとせ 十
師走 九
ふゆびと 十一

暦うり 十一
里祢樂 十一
大師講 十二
木の葉 十二
枯野 十五
山茶花 十六
冬の梅 十六
茶花 十七
枯芦 十八
大根曳 十九
生類之部

焼芋 十一
鈴なり 十二
寒念佛 十三
枯木の部
落葉 十二
散りもの 十五
八ッ手 十六
冬牡丹 十六
寒菜 十七
草うれ 十八
冬野 十八
芭蕉忌 十二
こがらし 十四
帰花 十五
冬至梅 十六
冬仙 十七
石蓮の花 十八
枯尾花 十七
枯芝 十八
冬籠 十八
枇杷の花 十五
冬かれ 十八
冬まき 十九

鯨 二十
千鳥 二十一
鴨 二十一
かのこうり 廿二
然る蓑 二十一
雁 二十二
ねぶかる 廿二
夜鳥 廿三
木兎 廿三
冬の蠅 廿三
穴熊 廿三
鯨突 廿三
粟 廿三
網代守 廿四
生海苔 廿四
鰐 廿四
河豚 廿五
鮟鱇 廿五
鯛 廿五
乾鮭 廿五
こまり食 廿五
時節の部
寒さ 廿六
ぜきん 廿七
足袋 廿七
冬ごもり 廿七
人表 廿八
炭屋 廿八
紙子 廿八
火燵 廿八
火鉢 廿九
火桶 三十
火鉢 三十
俱婆 三十
火の用心 三十
炭初る 三十
口切 三十一
納豆 三十一
冬の始 三十一
髪剪 三十一
蓑 三十一

炭 三十二
炭賣 三十一
冬の人 三十四
霜やけ 三十四
節季ゐ 三十五
年の市 三十六
ぞろ〳〵忘 三十七
春待 三十七
冬の暮 三十八

櫂 三十二
冬の月 三十三
霰石離 三十四
冬日 三十四
爆弾 三十五
節分 三十六
行年 三十七
岡見 三十七
年内立春 三十九

炭 三十二
霰の聲 三十三
臘八 三十四
冬夜 三十四
月見吹 三十四
衣配 三十六
格ごと 三十七
流るゝ年 三十七
大晦日 三十八

都而 百四十一題

四季合 二百拾七題

古人續五百題發句集

名月

穐之部

月ゑ金今宵一瀉かけ流なし　宗因
名ゑ名りそもく〳〵是ゝ秋の月　守武
名月ゑ櫛のまりゑ田のくりゑ　芭蕉
今宵は月小盃へなげこんん　素山
めいゝゝ居酒のまんと類ゝ　其角
月ゑ志の今宵ゑ明て無ゝ　鬼貫
名月ゑてまりすひの月ゝ　立圃

名月や　折の枝とそろく吹く　嵐雪
めいろうや海もあり月を山もこんもと　去来
ちらくと海よりふの月まさ望の月　思尺
名月や車きしらとは　番家　太草
めれろうや土手のそろれのあひた藪　浪化
隨分とはしもあるりろふ月　路通
名月やそろこしく歩行草の中　傘下
名ろろや鼓の声と　犬のちろ　二水
めいろうや志ろねとろの朝わふけ　野坡
更くくて鞠垣ととこしけふの月　言水
名月や今日をあるらふ秋の昏　支考
めん月やきのふの雨は葉大根　夕可

名月やこ山ゑとろよもとぐら　杜若
めの月や碇うちぬむ波のろま　買山
名月や陸のそふあるる日代をろあん　知足
焚くくて竈も用けしろふの月　友幽
名月や里の白ひの青き柴　木枝
名月ふをろまとて出ほそしら我　野童
めいろうやそろうくく鶏は俄き年　浪化
名月のとれもめくみや菜大根　許六
名月や寄ろ中よ稿を出と年ろれ　千那

月見

月見とゝ名ゐ所ゝふ月のくまなきをも
月見せん伏見は城のこゝ一廓　芭蕉
ゝやくを坊へおし辺山月ゑゝれ　去来
隈もなく名もなき所の月見哉　唐介
さゝきよりて我舟さゝて月見う者　意情
鑰もなき庵あり月ゑゝる　侍葉
ふきやなな月出ゝく来る月ゑゝ　洞梨
待も雫ふなりゝ月見この那　利牛
　　史邦

名月

とり火やおのれゝ月なゝ所の月　鬼貫
ふれとゝとゝ雪ゝらゝ赤ゝゝふ社月　雨桐
名月や所よゝとゝふ風光ゝ　丈草

月

我弟ゝゝ我ふゝゝ世ゝ月秋新　素堂
やゝとゝとゝ東伏ゝゝゝ一の月　其角
隣ゝり破風のかけゝる月秋哉　仙仗
江の月や深み浅ゝこの蝋ゝゝら　鋤立
けゝゝゝふ少ゝゝゝ月ゝゝよゝ　昌碧
かゝゝゝと笹のゝゝ月夜ゝゝ　梅舌
ふ伏抱ゝ湯ゝ月のゝゝゝゝ哉　北枝
おかゝけふ叢ゝなゝゝゝ月秋ゝ　一髪
とゝゝゝゝゝ通ゝ月ゝ野中ゝゝ　長虹
月のゝゝ月ゝふゝゝゝゝ雲ゝ　万乎
京紫去年ゝ月ゝ俗中間　丈草
穂ゝゝ月ゝ鳥ゝゝゝゝ　鬼貫

初月

秋月のうふ強なる雁のこゑ　言水
えん月や物は香さまる濱の宿　移竹

三日月

蜻蛉お初ひ去門まる三日の月　甚角
雲のき自てのこほろ三日はたき　文鳥
三日月や柱ふまわれ高燈籠　錢芦
はつを穂をもけて出るり三日のつ　李由
三日月の藪ふ道あはきあさる　万声

待宵

待宵や翌を二見へ道若を迄　支考
まつよひや流浪のうへは秋のそら　惟然
待宵ぬまつ賞せどや年のわと　牧童
まつよひや翌の連歌の表せん　素堂

十六夜

うがほなうよ踏ま月待宵の興　路通
待宵や立ばくしまる三絲の雲　乙由

十六夜もまと更科の郡の宗　芭蕉
そんうしや十六夜まそれ二夕と猿　耒山
いさよひや彩眼因はうふまろも　甚角
十六夜や首馬ぬ出くかつ保人　許六
いさよひや堅田ろりる神明謙　毛紈
十六歩はけしき分ろり比良伊吹　汝村
いさよひや眠れまもなれ海り五位　野坻
はきよひそさ〜紀さ〜宵の秋　洒堂
いさ宵ろ家出の近ひ人〻照　乙由

後の月

うまさうなとうがやの月の一二夜　素堂
海山紙も月見て後の月見う船　去来
百菓は香炉あらめてや後の月　洒堂
影ふさよたゝねはとゝる月見式　杉風
後の月まさるも侍るゝ秋茄子　古兩
三尺の松風さふし一後の月　野坡
後は月入るくかけよ星は空　鬼貫
穂のうへふ高低もありのちの月　游方
寒ゝうけの巨燵もあり後の月　斜嶺
月ちは袖を木の葉の十三夜　重秀
草も木も此國ふうや又の月　全昳
酒はきゝて膝のさゝふゝや後の月　長父

龍田姫

文月や後の月見る歌やのうち　和及
うかゝゝるほりの顔ひやゝゝる姫　昨非

文月や後の感ある歌やのうち　其角
かゝゝるる秋月の初うゝれ　良徳

八月も一下ゝゝあつし赤とんぼ　指巻
野も山も露ふ赤ゝるゝ月うれ　李雲

九月

菊月

あゝゝう九月日和や菊の照り　水奥
長月やゝゝゝ留ゝれ水ゝゝ　尺艸
ゝの月のゝゝゝみうあやしゝの星　良徳

初穐

たゝん秋を海も青田の一ツとり　芭蕉
初穐はとれの露かゝるのはゝ　惠曹
穐ゝゝや朝日汐はけしゝゝみ　卯七
蟲なくゝふゝやはゝ秋の日数哉　吉来
ゝゝの秋哉かゝゝとゝんとゝあもれ　荊口
海山のゝゝ穐ゝゝゝを朝の煙　風國
秋きねとおとゝるけきやゝゝみゝり　野坡
あきゝゝゝや星も屋ゝゝわは夜明風　林元
笹竹の萩穐ゝはゝゝゝゝこの郷　杉風
蛛風もまゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝ　支考
山水やまゝ初あきの香薫散　句空
ゝゝきゝゝゝゝ鷹のゝゝや毛のさし粉　浪花

七夕

七夕や梵論ほむ入ゝて笛を受　甚角
ゝゝ合ふ我妹かゝん待ゝ郎　嵐雪
動きなゝ宮なゝゝゝゝや星の床　曾良
七夕や稲ゝゝ星ゝゝかゝゝゝゝ　野坡
去佐ゝ玲ふあふのゝく人や星ゝゝり　支考
酒盛となゝゝて酒のゝゝゝゝゝへ　去来
七夕ゝかゝゝ移ゝゝゝゝゝゝ指合羽　杉風
不一合や離別の中ゝゝゝゝゝ　山峰
七夕や馬ゝゝまゝゝゝ川の湍　錢芷
七夕を待ゝて深入ゝゝ居ゝ　牧童

立琴

立琴やゝゝの志ゝゝゝゝ虫の声　可二
ゝゝゝゝゝゝゝ千ゝゝ蘿ゝゝゝ　希因

銀河

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

これや名ね一夜ゝ恋をせぬ川　嵐雪

西風の南ふかくやあまのかと　史邦

とり処と別邸のくもや天の川　八菊

五位の声ゆゝしくふるね天の川　汶村

あまの川かきまくりてもこされけり　宇路

かゝ紀のそゝや繪入の百人一首　許六

鵲や石火おりてはね橋もあり　其用

ゝとまり法師や稿らしの糸すゝ　之圃

七夕や糸に結ぶくゝ仏のそゝ　一温

恋さまゝ頼ひの糸も白ひより　蕪村

蛛の糸

蛛の糸

千蘭盆

千蘭盆や姿ゝ老の涙　捐西

盆ふ死ぬるとけの中は佛の面　智月

門並や宮拝灯ゝ盆は中　渓石

のけのゆなりても蛾一盆ゝ　朝二

せゝゝの柱ゝとて仏のかゝ　釣雪

拝待ふゝ世ゝゝれゝ西へ行　蕪村

せゝゝゝや往来とゝゝゝあるゝ　携良

提灯

人魂ゝ消ゝゝゝゝ灯籠ゝ　言水

子ゝ捨ふ長老の門や高ゝゝ　百里

る灯籠ゝゝゝく峯ゝ月　北枝

ゝゝゝ松の木ゝ間ゝゝ一つ那　長如

高灯籠

灯籠

美女美男灯籠ひとつに照さるゝ　其角

天の花に酔て保昌の大とうろ　宗因

父母の新灯籠かゝけける哉　由之

灯籠のあともまり行て高灯に　紋江

灯籠を三度かゝけぬ露なから　蕪村

ともしてん風に消さるゝ切籠かな　蝶荒

灯籠に芋の長者か如く歩行　左次

送火

おくり火に経よみかね身を待ふる哉　亀翁

送り火はかよはき足のふみちから　几董

おくりびや山よのほるや家の数　丈草

魂祭

稲の穂も実はよりなれ魂まつり　芭蕉

手まつりて父母の妻戸のあけぬ何　嵐雪

魂棚や蚊を血ふるれと哀なく　鬼貫

をとこ女よろこふ客や魂まつり　知足

灸して嬉しも旅を流川了　史邦

芋の葉の風の吹まて魂祭　徐寅

魂棚ゟなりし質をおく哉　雨柳

そなへもの我は何くそ魂まつり　卓袋

たはふれ宿や入相常なき魂　調柳

魂まつりおもひ得たかしき白ひろ　百里

山伏や坊主を中にたま祭　沾圃

に妓すみて枯ふなるかゝ夕魂祭　越

蓮まことに味なれば山の木の宮う那　湖山
あまほんまこと牙の苦生ふ蓮りく　来山
蓮ふあり門の乞食の祝ことそん　其角
待くる隙ふやあれこれ西ふあり　希因
仏の子は好こもおかうこと蓮まんを　乙由

棚経

棚経やこの曉の朋伽話みり　其角
こな経や世ふ法ふつほう坊主ども　燈分

蓮飯

文月やめてたく炊く蓮のめし　季吟
朝飯ふちてやることよたこの飯　里山

墓詣

去来
其角
嵐雪
卓袋
乙州

墓まあり
そしくも孫子とありて墓まあり
銀を罪のたうりやたろはあを
夢ふよく仏たふ爰ふ墓ふあり
うたほんや家のたしたふ墓ふあり
三浦ふ九十之諸やはたはあを

生牙蒐

一鉄
彫棠
百里
其角

かけ指や生精夏の袖はつ白
はきけふは者所のけをこふ
受くこ死牙とうこと人や生牙魂
渕明ろ陳あくめやはきけ牙なを

盆の月

蝶羽
含吐

かけても焼火くふしこの月
おり絵と鶏初きろ盆の月

躍

踊子や五町五町のうけむらの　宗因
をとり子よあをい畠の草ぬくな　去来
門毒虫とりて江口の躍この角　甫山
おりのくと紙よ流くとほとゝぎす　尚白
食の湯の汗み出る踊うち茶　李由
けいせんは汗臭くなる踊哉　木導

西瓜

あつしとも忘れぬ西瓜哀れ　歌川
対面とりてめつらる西瓜哉　嵐雪
裏庵や西瓜ゆなゝゝ物の本　曲翠
猪の鼻くゝとはうを西瓜うり那　卯七
ゝゝくと西瓜切るり秋の風　陽和

花火

小屋ゝゝ花火の音は割るる音　其角
おのうきゝひ夜更て涼し花火哉　且永
西雲の遠のこうらるる花火うち　てふ
追出して千秋楽ゆゝゝ花火うち　附風
ものくよ花火おそれ流ゝゝ　笑梧
うゝの戸い善流うトて花火哉　序令

残暑

ひやくゝと壁と好ゝて昼寝哉　芭蕉
朝も秋夕ゝも秋のめさう那　鬼貫
残ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ暑ゝ　蒙力
ゝ常ゝゝゝゝゝゝゝ残るゝゝ哉　李由
行くものうちうかうれる残暑哉　魚素

相撲

雨降る夜名きて稚う角力取
土俵名と名も優美なり相撲名　許六
駕うきやとこの手まうの取おくれ　其角
角力とは雨とふ波とを砂場の那　三角山
投られて笑顔やきしれをまうふう茶　亀翁
小相撲のきくこのく稚や薮ちらら　勝定
お撲名のくくふ著名り蚓の声　尚白
なけなふ灯籠うちけと角力北　木導
初秋や親ふるまーすまうふ名　朱紬
おもなけれ物うちえくる角力北　米窟
山うけのう春ふゆくとまうふう茶　春幾
小さくとわひと名茶角力式　盛弘
秋之坊

龍

凧

秋風や藪もくくけも不破の関　芭蕉
あくれけもまうこほくよは秋の凧　鬼貫
作り木の糸をゆくをやあきは色　嵐雪
十間ふも小粒なりは秋乃凧　許六
ゆうふこ跡くもうえをあれは風　初候
雀子は鬚もくくもやも秋のうせ　式之
焚くくその食は面ひやあれは凧　李由
とくくうちや龍ふく凧の祈ふひ細　四睡
陸墜ふ物とくまりは秋のくせ　程巴
吾一とりの裏めくくくや馬記は凧　北枝
木の股ふおちは鳥や龍のう茶　曽良
さやかくとふをあや凧りて秋は凧　沙明

早稲の香や少し揃へ刈り始め　湖雀
秋風や我と板戸はたはたおと　岩翁
蝙蝠のわくりもろくや秋のかぜ　毛紈
秋うせやこゝ幾くあそこの福させ附　游力
あきうせやまこと四五尺は杉乃先　汶村
秋の風むしの声くあわせまつて　乙刈
夕くれの實をかくあくりあきの風　馬高
いなき風やことし一生の子も吹　未山
吟酒を止まるゝ意しいなきはせる智　言水
あたうせお耳の垢とる波しゆ　去来
秋風や草を食はれく馬の髪　希因

分入

負室

風ふ分の入タくゝ身の寄しこの那
ふこしむや秋空高くなる日より　百人

扇置

横船

くせとても常なる妹のあきうね
今書もつとるはうのなるれ我　宗因

捨團

蕭角

源草ゝ秋も仕入れる團扇うち
捨うちゝ忘れあておうゝ窓のある　浮流

初嵐

芭蕉

ちつあしゝ先ゝも音し栗の速
初のくゝし魂は毛並ゝうまり　宿深

小項

ゝき晩の腸ふむゝうや初あらし

辻麦は鯉ひとゝ絵やゝ月嵐

野坡

ひくゝまうゝ水のあゝや初あらし

徳

露

寒がらく釜ゐ落て露見の初　素堂
山の雲とまりて雨こそや起とそや　鬼貫
朝ごとにおくとへつゆの法ゝ哉　不山
名露のちらけ仕業や淀の月　言水
法西は間や殘菊の香く客仲履　甚角
きのつゆへ仏く雨れりの草のつゆ　之白
葉よりなあわりのうやうや雫は音　嵐弾
夏葉の照のこりてやあきのはゆ　雪芝
古御所や雫日に移は名の橋　酉邑
芝ゝさは法西ゆちゝやる青う郭　千子
市人のすのちかゝは露の中　蕪村

霧

保の歳入

二百十日

霧園や雲は寄しきふ明海原　甚角
霧ゝき上のをちゝや霧の夢　猿蓑
舟ゝさゝ上ゝ朝雲ふ木ふ雲て　楚常
吹よせゝ江の一隅や月と雲　苔翠
あききりや水なゝゝ輪の雫　毛紈

歳入のちゝみ箱より西風ゝ船　野径
やゝ入や木の間の月も跡しき　舟行

日照年二百十日は風をすゝ
菜大根二百十日の銭暑ゝ船　素堂
翁草二百十日も法ゝゝ　李由
寫下

稲妻

あの雲を稲妻と待つ夕べかな　芭蕉

いなはまふ大佛拜む野中の角　府兮

稲妻やおさへてもしまの空　野坡

いなはまの引てもとまる山はなし　丈草

稲つまや海のおもてをひらめかす　史邦

いなつまや馬引かくす田面の那　桐梨

いなつまや周の鏡のかけ人　氷花

稲妻や折くべき薪のひまゆ見し　湖風

いなつまの戸板ゆ見る雷の園　幽子

いなつまや池ゆ出る雷の園　卧高

稲妻やちはくゆる世の城　素洗

いなつまの行先くの小家哉　孤白

野分

ゆくへなき雲ふ組しく野分哉　来山

日枝高く吹かくる野分哉　言水

まよまよねちりく草の野分哉　立志

野分ふく雲のいとぎや乾ぬみ　探志

なるさしのをりとりとる野分哉　正秀

おのつから草のちるべく野分哉　圓蕉

鎗持の帰りまつぐる野分哉　琴風

ちりやこれ野分の朝はたらく　紫友

冷くと朝日ゆ見し野分哉　支考

鶏の尾ふたくられし野分哉　荊口

河内ゆ見て野分哉　圓水

吹ぬくや野分はあしきまとわらし　之順

早稲

早稲の香や分入る右は有磯海　芭蕉
子稲干さるや人ゑゑをむる山のあひ　云来
河骨ふかくれ白し早稲のさま　牧童
こせの高や田中をゆけば弓と法　支考
夕暮や子稲ちのひて人ゑゑを　松嶺
臥しほを出るや早稲の舟多　自室
早稲の香や雁ひ出さるる菴は舟　丈章

落穂

落穂拾ひ鶉の糞を拾ふ　鬼貫
あち穂ひろひ日あるる方へ歩む　蓋村
辻堂へ投げゆく落穂この糞　青角

木綿取

綿弓や琵琶ふるくさむ井の奥　芭蕉
簑ぬ干して窓よりふく綿の秋　孤屋
里の子と畳ふしぬ屋根木綿哉　湖水
新ごろもより散るあやとり　泥燕
日あたりや綿とりまろと蕊きそ　富豆

田刈

稲刈やその田のそこ中古家所　許六
汚ぬ足の跡のみ多し刈田哉　何之
目ふるし稲刈未だ調ぬ　椽青

晩稲

晩稲田の畦ちるうつや年逸り　越水
ありとして案山子もちける晩稲哉　蝶夢

法さき呂

たゝみ箱さいかくまを新や司石　山店
拜をとて烏帽子落とを司や　太祇

逆峰入

七夕清う侍都かけすり逆の峯　淡く
峯入や雲をまん毛よ咨ちをを　波上

後彼峯

彼峯さくゝ咲う月こそ西よあま
風もなし秋の彼峯の幾屋うし　宗因
鬼貫

初潮

初潮や細いとこそ水ふ帆うけふ孫
うれ志ほも驚くけるを儀京我　嵐蘭
けう汝や小松の中丹月の新　和及
秋〳〵ちよ追られてのゆる小魚我　乙河
蕪村

八朝

八朝や二日の日をまことそとを　宗因
八朝や閼伽ふ稀けるを樹くふ　乙州
八さゝや桂は舞はそちり是川　野坡
八朝や踊りゝ足袋かしとまれ　乙由

弱近

きくゝや清ふかそるこはむ久　コ斎
ふうふる函谷や名ふ駒馬逆人　甚角
蒼ふ立やこゝふ目ふゝふ駒むく　秀風
弱ふうふ志ゝゆゝゝや額ふ　蕪村

駒牽

駒牽の木芽や出ゝん三日の月　去来
京ふ立を皆こは初きの戻りをを　浪花

放生舍

うれしけれ浮世を逃るる放生舍　桐雨
海老稲も実入り頃とや放生舍　安邦
人ごろも多そなつあり魚ごころ　露川
先いのち新ふ達へとやそなつ鳥　鬼市

案山子

笑まいとらふる案山子の腰刀　玄来
鳴り渡りと刈る跡のかしまる　諷竹
えもうせぬ物ふてあるかし哉　呂湖
山畑の案山子ばかりて笑ひて　重五
ちる人もなりてひろかしこの那　惟然
物は音ハ為ち呑む獺とかしこれ　雲口
しまあ〜哉いろてちるハ案山子哉　光山

鳴子

そのさまを援田守らねかしこる　全峯
世の中にうえて引ちる案山子哉　如泉
一ト夜さもゆるして森せねかしこ　卯七
ちうんほりと山田のかし附西ちて　和角
鳴子曳二日の月もちろうの那　言水
七十のこしもそこるなる子ひき　其角
豆酒の殿ゐ門田の鳴子ひき　野坡
なる子引おのろ豆森をおとろきね　乙由

引板

山ばくき日の出ば虹や引板の綱　竜翁
ゆま蔭や浙呼子ゐるひとこれ音　蕪村

落し水
渋鮎
落鮎
初鮭

村〳〵の森こえかねおとしかな　芦村

小山田の水落を日やいとしかな　古祇

衰わしき市ちる鮎の暮のさひ　杉風

渋鮎やいろを栄ぬ蓼のちぬ　寛満

落鮎の水よわりはてえ出かな　勇松

追落を鮎のよとみや石のおと　横几

鮭の肘宿も豆腐汁雨夜かな　素堂

ちん魅を隠居も客とちそれなり　寒玉

さけ飛んでさゝ波のたつ川辺かな　園木

をり川鮭やか保て荷おの宿あるかん　治徳

崩簗
すまひ
河鹿
沙魚

ゆく〳〵と妹のゆくやうるき簗　乙由

くの簗の魚ふ波にやくたれ簗　太祇

ゆふ雲や雨を手まず驗清り　野坡

まくしさの府発より詣まうさる那　呂長

廿日を詣る亡ろもあるふしたる紀　半残

あやまりてきこうおさゆる河鹿かな　嵐棠

水ちると流れてなき出をかしかな　園友

袴気にくるも詣をとこ非常かな　巴山

粕買の駒わとめてや流れ沙魚　朝叟

四ッ手舟を世買よるん月見川　蒼白

沙魚つりの小舟漕なる窓の前　蕪村

升市

二ッ買欲をおもひ升の市　一嵐
むつましく遊ぶ人達ぬ升は市　作者知
市の月さふハ九合の月もなし　涼佛

新そば

新そばや夕紙行燈を名ふさと　支考
もん蕎麦や名を重て運ふ唐辛　夏晴

砧打て我ふきうせよや坊ゝ法師　芭蕉
おりひめ星恋る名をうつ碓うる　鬼貫
相槌のうちふて明るきぬとう有　山川
きぬと打人も裸くらをれけり　鋤立
ふる掛の紙ふりをさをもきぬとうれ　去来

擣衣

鼓かちきぬさかぶたゝあのおと　仙化
うつ馬よ拍子ちゝとうれ砧この素　巴風
藤かゝて遠くなりうるきぬとう　破笠
旅人ふ村とことうとれ寒ぬとう有　全峯
とのたゝなくさみよう川きぬとう　一笑
山里の碓やさふく嵐くきうう絲　旦吉
生業をちようくさせてきぬとうる　千川
辰ふ起て酒のむきぬとう那　昨應
さびしさふ月おりやも砧れ　孤舟
うう絲ふもかうらね市のきぬと我　立志
絲ふりたゝ現ふつよききぬとう　七里
三日月の嶽よ道ふれ碓この有　万声

漸寒

やゝ寒し　早稲はひゝらしの角芽立　野童

足ゝらぬき朝戸はおとゝやゝ寒さ　北枝

やゝさむく人をうらかふ秋ごゝろ　乙州

朝寒

朝さむやゆをとりみそめて兼の巻　風行

あさ寒み酔のまぎれよりうとゝや　北枝

朝寒や関のゝ鶏のひゝく声　蝶夏

病人と陸木ゆゝ寒し秋ごゝろ　丈草

落ぶ世の夢のうさゝる夜さふる　許六

松うせの秋酒をまゝと秋ごゝ我　支考

ゆゝ寒ゆゝ猫もかゆゝとよごゝを沈　甚角

夜寒

泣と夢さめてよゝと泣秋さふゝ　来山

あてもなきゝゆをゝ夜ごゝのおりひゝれ　諷竹

掃はなゆのいゝろりよゝゝる夜ごゝ角　李川

まゝこ一ごゝ荒ゝくまてゝの秋寒ごゝれ　仙化

秋ごゝさゝや蒲塗ひとゝゆゝさゝれゝり　百里

客人の夜ゝおゝ行ける秋ごゝる　程巳

打鉞は音やよさゝふの障子こゝ　汀芦

まゝとの里ゝ川ゝ秋ごゝの火打我　其流

ゝゝて月もなゝゝる夜さふこの角　蕪村

木はゝゝふ鼻紙あゝる夜ごゝ条　風麥

生塗ゆ袖を氣はゝふ秋ごゝの那　李由

新酒

新酒の秋をしそおりふ明石米　宗因
早稲酒や稲妻よりも出を焼うりと　其角
風よ名の付く吹よりも清酒うる　その
新酒さけ出るしも青き月こしの菊　酉花
五稲酒や秃倉ふかけし牛の筒　虚谷
新酒くむ少盃ところなり砂はら人　亀翁
松の葉も紅葉ふとるりて新酒うる　諸九

露 附両

袖はらふりうしし雲や露ちくさ　嵐雪
菊の香はりのよはく日や露附両　希因
露ちのいまやとくいて露しくれ　涼佛

炉 灸

秋晴やし伽羅割るなこの錯義し　坎日
ちちさちくるのうるる鳴く秋の両　野坡
炉のあの鶏はは尾のちくりまり　孤衾
松のなふは地よ立ちくふ秋の灸　丈草
やきちめやうる底の茅を踏ぬる　苔村
秋は灸胡弓の糸なる移り形　喜蓼

秋空

穂のそら尾上の松ふとれより　甚角
擂は木のうもさらむや秋の空　支来
移りなれそふ走あや秋の長　丈草
風の根を照はけくりあれの空　卯七
上ゆくと下るまや秋のそら　元北

穐の霜

芭蕉葉やまき残されぬ秋の霜　指善

うと赤き鶏のかしらやあきの出も　史明

長き夜

九度起ても月は七ッの鐘　芭蕉

うつき夜を疝氣起ぬ縁りて猿露れ　鬼貫

秋よなしの長さ啼切くとこの山　丈草

菜のこゑ秋もなかりし猿は七声　北枝

くゝりめをうつ秋長き踊かな　沾徳

粟稗を夜長になさん秋三月　野径

腹ありて秋あるは秋や荻の声　怒誰

ならぬ夜をおしみ成るる膝かな　草士

ちきよや蚓の声も長根寄　蝶年

秋の暮

この道や行人なしに秋の暮　芭蕉

此まは暮祖父はふくりうその顔そ　其角

舟をに首届の秋は夕暮かな　嵐雪

癖になりてらましや秋の今時分　千春

よき従弟尋ねよりその秋の暮　玄梅

蓼の穂やひとり乙なれて秋は暮　提巳

あきのうれいかくしかくくる夕哉　荷兮

馬共は浴もさらされし穐の昏　松留

夕らし稀へいづれもあれとも秋は海　園友

あきの気留る法かくれて坂りかり　山店

人を待店あるすさや秋は昏　楚常

秋はくれたり合ひもなし舟遊山　紫紅

柿

昔やら今やらうらぶれ物きのくれ　鬼貫
籠ゝ見てくさしき炭の白こゑ　昌碧
石切の音も竹きり秋はくれ　傘下
谷川や茶袋そゝぐあすの茶　益音
僧の居は縄のとゝれよ秋の暮　不炊
鳴弦もあきらもかゝらと縄のくれ　車庸

柿ぬしや柿を通るあゝ女　玄来
帶落の柿はは音きく涼しさ　素堂
弱柿や障子の穴に夕日うけ　文草
柿はるゝをふ供のよりとゝ殺　利牛
渋柿のこんまて枝の住居の家　龜翁

葡萄

月百は四ゝ葡萄かゝれば甘露あり　其角
酒仙法華のはちきやふたら柳　史邦
柳はるゝたゝもあ淋しき葡萄くれ　仙老不知
さらやもなくゝ人立るゝ姿ゝかゝ　打聽

梨

今宵うる梨の帶とく男部屋　沾德
青梨やうゝ人もいとせん秋の水　旧國

茗荷

かけうゝと小屋別すり茗荷畑　龜翁
辻ゝへ市日ふれうゝ茗荷粉　晩山
若たゝと既ふ一ゝの灰と形り　龜世
蠱ゝ下茗ふ床しきあゝとうな　茗村

一葉柳敬

水の蜘一筋あふちうく　芭蕉
まる秋のきりぎりすかな　甚角
角文字や相の落葉は二筋うみ　そて
相の筋や落るところを手ぶ屋は　甘泉
庭掃くそはくひとくさと一ぶ花　苔蘚
　　風徐

庭ちりて出るや　ちるふちる柳
月初と月折ちり残る木の間より　芭蕉
主まつ素の用意高や数り毋ぶき　素堂
行馬の筋ぶもちぶ寿　桃隣
さひしくうや花井殿と数る寿　李東
　　嘉中

艸の花

七草ふ郎味噌のうまそ秋の花　言水
艸の花ちりて老母筋のこなりうり　東滝
秋深し人切ちぶ社草のそれ　風國
草ふ花愁ふ妹となりにきり　暁臺
我ちちよ喫てもぶちー筋の花　五瓶

女郎花

ゆうんうよ酒は後のをうるうー　鬼貫
けふぶりの賀ふあふ花や女郎花　杉風
女郎花ものとうふふるふぶ　野童
松風の里ふ汐くあをうるうー　茨口
ぶちふくと露けし屠瓜の女郎花　乙州
ふうるふあをうるうや岩の女郎花　秋之坊

木槿

道の辺は木槿を馬に喰れけり　芭蕉
むくげ垣花ゑがくふる藤入まつ　観水
わくゝ〜と木槿の蕚はこぼる〜　土芳
川音や木槿さく〜戸ハすこ起る　北枝
ぢらぬ里は木槿の白ひとつ　四睡
一くるゝ草紙やあるはむくげ垣　素牛
りんの間ふ脊戸の木槿ハ咲ぬん　如柳
手ぢかの縄は栗や木槿垣　見壽
布ふ巻てあまりむさうう葛の葉　治德
おそろしの爺をかくすやくつの花　桃隣
数ゝとゝ花もうゝみね暮は西　北枝

嵐尾菊

嵐尾菊のしるそも御名保久敬式　鬼世
みそさきやゆ限ふえ沙保觸　其角
嵐尾ゆーや月よかくらさる菊も色　曉臺

藤袴

夕日さすと簾をあるゝ袴を　柏兮
雨のあ〜ゝるゝ〜や動〜く袴袴　一武

蔓珠沙華

かゝ〜ゝとやみ猿のゝあに蔓珠沙華　甚角
恋死ぬゝ契ゝゝ人ゝ〜ゝんゝも寸本　寸木

男色

黄昏を汝もゝ絡るゝ男色〜　麥起
秋の野ゝ〜一人の名なりとこゝへ〜　半睡

朝顔

あさがほや酒盛さめぬ隣かな　芭蕉
朝顔やあるじ忘れて人を送り　甚角
朝顔やあるじ薄の形変り　去来
朝顔の白きを露もこぼすなり　荷兮
あさがほや赤一輪ゆなりかな　舟泉
あさがほや霄は故郷の焼わたり　呂房
朝がほや垣ゆ垣の這あまり　杉風
朝がほや笑ふくくを恥ぢる花　北枝
あさがほやきのふ五つ六つ咲　牧童
朝顔の夜よりはけし鶴の声　其糟
あさがほや雲の日新の今さとし　蚊足
朝顔を八ツ時ぬる夢くたて　山川

芙蓉

あさがほや初こしの水の残は月　胡及
朝がほや虫ゆくゆくの運　来山
朝がほの種とはきの蓉の素　一笑

海棠

枝ぶりの日にくかくれ芙蓉哉　芭蕉
百合ゆる芙蓉を絡るいのちかな　風麦
ちとあくふ小刀もあり玉芙蓉　沾徳
まめくしふ紅の付くや秋海棠　支考
秋海棠ひらを絡ふ蝶ひとつ　素堂

秋木瓜

秋好の妹をすれば木瓜　韋吹
ちやんとしく手草の中に秋木瓜　路通

萩

萩原や一夜はやとる山の犬　芭蕉
答ともみえを嘉あり庭の萩　其角
寂寞のあしらを萩のあひき哉　土芳
朝露はちりぬと萩の使ひ哉　その
萩さらは庵のかたりを藤ふ朔　来山
萩ちらや神の子あらはつとを水　牧童
庭園の蘇やかりあると稲の端　猿雖
そをそをとりしそは野の多ありうれ　忍市
立ちは庵ともそをしを萩は露　車庸
萩を来くを立ふはりくき雀ら茶　酒邑
村雨や萩の根をあ新蜂の声　冷袖

萩

蕎麦

萩の穂や陸を作うむ屋生門　芭蕉
友とをれ萩も文車の萩のを　鬼貫
雨は日や萩を蔵ふを庭の萩　卧菖
あらつきの法燒きを一萩乃しを　岩翁
萩萩や春の季ふ梅さらら　貞室

蕎麦ふまるを荒てをてをを山路ふ　芭蕉
やををんを捧ちらせんそはの新　宗因
孤火の赤ふけてるや蕎麦はをな　荒雀
暮まちて盛をせけりそはのを　酒汁
をん蕎麦やら旧の木芳大根　閭如

稲の花

あつさとも志のきはけりり稲の花　游力
七度の花の時しめやかに秋はと郷　智月
品川をとゝまれてさゝしの秋はとる　峡水
吹ふゝね風の目きゝや稲のゝ穂　巳百
鍋鈴の立居ふ数りねらねは花　遥里

番椒

ちりこ木も紅葉しにけり唐うゝ　宗因
番椒茄子ふあけもうをハれを　素山
花ゝゝ目の蜻蛉のやとりや蓑椒　米盃
玉虫の羽いさいけやたうかゝし　探志
ひとうきくゝとるものや番椒　野坡

糸瓜

佛あも笑ふを剛ふ糸瓜哉　鬼貫
ちきゝ〜ちゝや糸瓜の糸ハ捨ゝり　南甫

瓢

針立の撫〜這入るゝ〜こう角　許六
森をゝゝゝや起さとゝゝも青蛙〜へ　季邑
ふゝ〜ゝ蛙ゝ蛙ゝ音ゝ式法を庵ふゝ〜ゝ　亀世
ゝゝゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ　土芳
ゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ　風草
夕都の花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　秋及
行の声許由うひさゝゝゝゝ青一　甚角
蔓ふゝゝゝ僧ゝゝゝ落る瓢この　希因
頭礼の目皇かきゝゝふゝ〜ゝ那　蕪村

蓮実

蓮の実は飛ひとしらみてもさまてもくとは貫や風みものくととてさたら　嵐雪

蘭

らんの香や蝋の翅ふしきこうたく　芭蕉

盗まるる蘭やとも食の餐の下　嵐雪

秀ふれは沼のそもとの蘭　宗因

よるの蘭あふかくまてや金臣　蕪村

とせ

秋風ふ巻紙折らく芭蕉うる　凡兆

ちらくふれて芭蕉のかけの小信哉　遠里

家ことはしあるる窓のもとせ哉　園之

春雨ふわまてくく芭蕉の栗の角　汀村

花野

桔梗

なの中をかうてりん花野うる　胡故

ふくかくね風の花野のさてれる　泥燕

燥風のまのそうく行花野の南　卜志

馬道もりてそ引とは花野のう　探泉

山伏の火をきうとうと花野れ　野坡

いきあくく牛のようとう花野うる　野径

野あそりや花さそり衣きき母うる　徳元

秋行くちりも桔梗の蒼この茶　左次

村雨やこるくちりも沢桔梗　幾紫

桔梗ちくあれ花色う持佛堂　芸村

薄

角文字やいせの野飼のくるる芒　甚角
燃きれく蛍燭をなく虫芒系　荷兮
寂まるても起ちうゝかう萩落　路通
花をゝ死戸みをきまれ夜を我　牧童
抱おこと西のをゝき秋をゝ虫うれ　苔嶺
穂落をゝ稔よりも夕も畑の畔　芦本
ゝゝと目をきをゝう蔦ろ角　野坡
おり移き鳥ゝをゝ落ろ角　鬼貫
ま移くたゝ人みなゝき芒の那　素山

紫苑

野菜ゝと折をゝんおゝを紫苑ゝれ　笑林
ゝろゝき紫苑の下北野菜ゝる　蕪村

野菜

重箱ゝ花なゝをきの野きゝゝる　甚角
きゝまゝにゝ笑ま野菜ゝ系　句空
り道の野きゝの果を湊可　柳宴
菜刈北道ゝとゝを那きゝゝ那　露川
松ゝ根ゝゝ代をあゝゝ世扇我　永参
根を石ゝこれゝ川系の野きゝゝ　亀翁
角石を拾ひのこせ野菜ゝの角　尺州

鬼灯

鬼灯やもゝゝ蓋かゝゝと娘の子　呑水
ほゝ付きゝ傾城のゝく網子ゝれ　進寄
うゝゝゝ鬼灯ゝ灯吹くゝや猿の負　泊荷
鬼灯や清系の女ゝ生ゝゝ　芝村

鶏頭

鶏頭のひろをうつしをや金まつら　丈草
岡寿を寿もるこゝね寿ふ　鶏頭　史邦
花もろの日を残りけり鶏頭花　野坡
雞頭や紅錦繡の帳まきを居　林風
夕くれふ仏を散くさん　鶏頭花　安信
鶏頭や唐のかしらの夕日こゝ　亀世
雞頭を焚うてゝ　やそ　もの月　文鳥

蓼花

花もうし佐野のあうりの蓼の花　其角
盡ふさをを嚙むうり蓼のさ那　琴風
拾穂やほうもさもるたゝ花　堤亭
こ経の十歩ほうてのうこ　蓼村

稲

無雀茶の木をうけや逃ところ　芭蕉
い稲うの川く田よ出むうふうゐ我　凡兆
夜は夜や稲こく家のうふ声　万乎
稲塚ふ高汐ちき川京この南　横几
ひまうり稲ちり寄もかりうり　ち弧
稲村の落をこくをる雀ろ京　狐屋
い稲といふ名も手かゝるや姉ろ門　史邦

蘆穂

一本の芦は穂中せしぬせきこの京　防川
引寿の跡よ起ふ穂芦か那　全峯
ぬしの穂ふ暑うり方や客の脂　去来
芦の穂や鱗をひて折もせん　其角

尾花

ゐる蜘や尾花ろ袖の紋とこ波　重頼
白玉の尾花ゑくなりぬれきろ　根子
さゝ波や穂よ出ね先の尾花川　負室
山伏ふ鼻うきれゝふ尾花哉　東朝

菊

起ゐうふ菓子のゝなり水のあと　芭蕉
菓をきる跡まうゝあもるうりゝ　甚角
霍の声菓七夫のなりあこの菓　嵐雪
きく咲ゝ毒根のかきりや山畑　去来
棚下にのゝたもや菓の新法師　許六
菊をたゝけ菓ゐある雪の曇う那　杉風
徒かくのゝふね行屋や菓の花　李由

花や菓やはゝと岩根のきくのそゝ
清定の外うや きくはきさりそ
行馬はゐふ花形ゝ菓の花
酒うゝふよたる波うや菊はゝ花
菓畑先人さゝむとあるゝう那
さうゝさに垂ゝ海へるや屋の菓
百菓も咲ゝや菓の宮はゝ南向
ちふきくのそ西ゝきゝ夕ゝう那
塗物ふうろふ影や菓のそな
菊の秀よなゝや山系の古上戸
きゝゝ粒ゝゝ佛のゝてかゝし
菓のゝや古元雑波の呑ゝゝ

負室　宗因　鬼貫　梅盛　正秀　幽雪　嵐竹　諷竹　木導　北枝　千那　千川

未枯

うふ枯やそれらけさとの山　毎雨
未枯や魅とくみめふたうけ中　雪子
うらうらとうや豆腐とうふ門の桶　青峨

烏瓜

俤戸ヶ谷の夕日やうらぶ烏瓜　亀翁
市人の声ゆもあらをかふを瓜　柮雪

蔦

蔦かくうと亭そのうちひや牛の蓄　野坡
蔦の塔ふや見売初ろふ岩れ間　卧高
石山は人ゆも蔦のうふおりて　乙州
せるうはくふ月まうと足ふね梢ふ　里東

梅もどき

ちらしうや温飽ふうくの梅もどき　之道
初よりゆふ人ふうくおくし梅もどき　乙州

ねうと

うえ玉のねうとゆ角やかうつふり　尊吟
朝うゆやねうとの蔓の法とうれを　及肩
うえしうの蔓ふ余りうるねうと　薫村

芋

煮てう高野山よりうしし芋　宗因
芋ゆゆ実のうるゆとえ三日の月　鬼貫
いもを抜て西をきく風のやうふ　其角
秋まうてゆ煮ふゆ生をいゆの蔓　西霞
芋を抱て酒ゆ対なけうふの渕　桐葉

男郎花

間々菜や有とけわ〜れ蓬のはも　曉臺
まひきるや援ゐそおりふまく子立　一邑

刈萱

刈萱や露ちる新の草はふ〜　牧童
かるとやそあふじし此跡もよろろ　巴丈

木槿

木槿や六尺四人かろめうを　其角
りくせいの花は宴ろふね夜きル　尋有

木槿実

賣商の一樹出まねよ〜此かや　西雅
ちもの朝楠擅の実れこそれろ　北圃
さ〜ひ〜さや吉舟をかやはおりふ付　桃隣

椎の実

何事ぞ〜椎ゆる里の松葉よる　其角
ゆをあう〜ろふねや椎乃九折　三翁
れ西ふかひあるうけや椎の音　岩泉

榎実蘆

小紅葉榎の実をちろ〜白ル我　其角
実なるより油ふたりは榎木ル　路通

栗

生栗を拾りたる山路哉　其角
毬栗やまふさ〜ける法の場　嵐雪
栗の花のあるきものは栗の上　惟然
落栗は芽好きかんは嵐ろ那　透雲
毬栗の笑ふも淋し秋の夕ゝ　李由

熟柿

木伝ひて穴熟歩れ熟柿の甫　丈草
小上戸熟柿の林かくれさり　一蜂
棄の啼く声よ落る熟柿哉　百花

紅葉

山ぬさくこゝろと表やちり紅葉　其角
白くれりみちの外ならの町　鬼貫
ちらふね人とりのいひて見る和歌哉　東順
肌寒し伐切山のうきとみち　凡兆
りみちこえや火折もうつを染火縄　野坡
山川ふいはりかくを紅葉の甫　如柳
ひあんて拾ふりみちをうせさり　秋之坊
ちりそめそ夕日暮金ちり和歌　野童

茸

松の葉ふそめ火まつけ薄紅葉　油
ちち木とるおほしめされを槙茸　其角
拾落ふ松茸こゝねの白ひこの茸　嵐雪
松茸や囲炉裏の中ふ拾ふ足ふ　奥児
ちり茸の裏より拾ふ日蔭ふ那　園友
まち茸や番とも絞しを負ちゝ　泊蓮
紅茸ふ明野の比丘尼なんつゝや　為有
ほり茸や大きゝみ声はなちり　木導
茸かりふ日いまこと高ゝ岡の杢　吾仲
たけうりや黄蕈も児ハ鱈ゝ負　水奥
茸うりや人ふとゝ鼻は先　利合
去来

虫

蟋蟀

蟋蟀や風ふ吹くる虫の声　鬼貫
今宮の虫とゝ絡なり法ん法ほし　来山
暮はやと芭蕉ゆ初く虫の声　許六
蚕舞の売もくさるやむし〳〵のこゑ　壺中
むし〳〵の音や関宿舟の蘇桑の中　養浩
燈明よむし〳〵もよくねや比叡の山　藤葉
虫の声や木綿布のわとくるま　汝村
五根まくは暮風は中や虫は声　李由
生れ法く草のまこゝや秋のむし〳〵　文鳥

蟬の音や株ゆとと葉の日はゝる　汝村
たゞ秋は息のあとれやのとほ塚　楽蜂

蟋蟀

秋草ふ仏のゆうくりと黒き蟋　万子
たゞ〳〵よくもとて秋の小てゝ我　牧童
あきの蟋一筆あと敬ゆや爰の申　桐

秋の蚊や血よ吸ゝとれる酔ゝろ　粛山
秋は蚊や友の減のを泣けり　只言

蠅打をまゝ捨ゆすり浦のあた　泥足
あきの蠅ゝふ高せね日向れ　史邦
秋の蠅うゝを むやく足せゝ　秋之坊

秋の蛍二夜ゝゝ窓ゆ人ほ　鬱打
月は夜ゝゝやゝく秋の蛍北　櫻良

松虫

松むしふきうの花をうれへ友もなし　其角

まつむしと跡さだまる新うの京　車来

夜虫をとるあとより啼けり　一髪

まつの虫の明夜へ松の白ひうの　沙明

鈴虫

鈴むしの啼りさく帷両夜うみ　季吟

さく虫や松明先へ蔦させく　其角

鈴むしよ客をかへさや廻り縁　凹凸

蟋蟀

蟋蟀の妻ハとさくらん　宝角

蟋蟀やかろうさまつくく小夜月　荷菊

我宿のとろろきとはく鄰う角　百里

蓑虫

蓑虫の家宿しくれ野分うの空　淵泉

みのむしは嘴で枯木の風情こそ　鋤立

蓑虫を千種の花はかくしう郎　史邦

みの虫や味ひうるしと啼ふきり　芝村

蜻蛉

山の端をまんまかくとや破れ笠　其角

蜻蛉や追うけてりく泊をんな　汀雨

幻の秋のゆくへやあうとんは　支考

蜻蛉はまてゝ蠅とは笠の中　太草

とんぼうの鶯をかゆる夕日うの　沾荷

蜻蛉のはうとねけうる廊下哉　斜嶺

日を斜関西の蜻蛉にとんはうる　芝村

蟋蟀

床あるゝいひきゝあるや　蛬　芭蕉
さむ月や鬢をさゝるきりゝゝす　其角
灰汁桶の雫やみけりきりゝゝす　凡兆
蟋蟀きゝすれば声もかるゝを　智月
秋の夜や爰と斬ときりゝゝす　水鷗
ゝゝまゝや先人来るゝある蟋蟀　壽川
引まゝけて草に首ありきりゝゝす　乙州
あの声や露よむせゝるきりゝゝす　従吾
賣家のあいさつもなくきゝすれば　蛬　范字
なゝ聲やひゝゝゝあるあの蟋蟀　車塲
きゝすれば穴もるゝときりゝゝす　太竹
常燈や襖あらゝにきりゝゝす　嵐雪

竈馬

端　蛬

月を老ぬゆひうまれゝゝる竈馬　来山
古城や炭くゝなるありゝゝす　鬼貫
さびしさをさゝひきゝゝる竈馬　舎羅
居風呂もりの入れゝゝあり　蛬　希因

峠や竈馬塔ゝ山をとりの淵るまゝゝ　越人
情出さゝや月の名殘を啼くゝゝす　正秀
磯際の浪ふ峠入ふいゝゝゝ系　惟然
食いこゝを柚味噌の釜れいゝゝゝ　程已

かまゝきりの鎌ゝゝひまり露の玉　錢芷
端　蛬　郷や爰引のこゝと萩れゝ那　北枝
うまきりゝれ鶏ふ双むゝふ蓋ゝ系　凡峯

蚕

秋もそやくさくさとあるぶと和の蚕　風國

川株ふ足引うゆはいまとう系　溪石

二ゑふなはは青田ふ　ふみせー蚕ろ郎　雨柏

蜘二ろ式引まゑろむいまとかる　為有

綿の蚕ふ巻迄らく蚕この角　昌房

竹の戸の蚊帳ふとひはくいまとう船　伸風

蜩

日くぐしや捨て蚕くくもくく日を　きて

蜩の声そろみさの親のはと　弥五郎

ふくくしーやまく人れのる瓜そろ　凉佛

ひくくくしーや松系ふ倦蚕ふの戎　甚梅

渡鳥

浦浪や通しも交はろろう多　去来

山端や濡り行きくろる鳥のはる　太草

日ゑ西ふ西のこそそやりくろ多　野坡

吹息もころはは付くふやろろう鳥　游力

聲くろ見小多の中紙逆渡り　近之

小多

秋の野やこかくはは小多れ小鳥　虚谷

板蕈や秋の小多の歩行音　落梧

小鳥ゑはは音蛾しさよ板ゑさし　蕪村

鶉

榎の実敬る鶉の羽音や朝嵐　芭蕉

久くまとりてなると鶉の羽音う那　一保

雁

酒買ふ伊勢の両夜の雁ひとつ　其角
ア、うまの伊勢の浦は名を我　馬莧
ちりの一ア哉りちあるる茶湯客　風國
起こいうえて夜明人なし一ア のちを　万平
ア、うの稲も去りうみ笑わかふひきや　越人
初雁や比良く追分帆うけ舟　木節
行ア の友社はたきうや奥の柳　惟然
ノの行うう丑かく哉や衛田の橋　北枝
鳥帽子寄て白きりの昼小田の雁　嵐雪
かうの稲の名下ふなの付程淋し　去来
ちう雁ゐ行灯とゐるはくふりと　落梧

鶺鴒　鵯　四十雀

せきれいの足ひとかの稲一橋の霜　芭蕉
いるはたきの鶺鴒の尾の契りうの　史邦
せきれいや磐土と稲る畔のうへ　磐盤

庵りゆもう丑ちとを鵯の草鞋うる　嵐雪
目を縫一百舌ゐるも寄一体清の声　歳人
鶺鴒や木芳庵らうれうまひぬと　露川
此森もとかくうるまりりとおと一　蕪村

老の名社ありとも きくく四十雀　芭蕉
世の中や濁りくくて四十から　虚谷
かーとけゆ出てきり丑きり四十雀　可吟

鶉

桐の木ふらふらと啼かゝる塀の内　芭蕉
伏見あハ町屋のうらふ啼く鶉　去来
日あたりあせらるゝと鶉う哀　正秀
馬夫よみたてられてなくらはら　臥高
ふり鶉時計の六ツもうゝせまり　史邦
ゑり雫ふ夜を待めると鶉う那　山店
旅人の小判ゝくはたりるうはらうな　園友
栗は穂をこんあくはの附や啼く鶉　支考
中畑も落付て啼くゝはふうれ　露川

帰燕

燕もお寺の太鼓かくり　うゝ　其角
菜屑もとゝゝと帰るつゝゝあ哉　原岱

鴫

刈ゆゝ早稲うゝくの鴫の声　芭蕉
石打て立ゝ鴫ふあゝれ　言水
あゝふふ鴫とらふるなるゝ　亀洞
鴫突の行新長き日あゝゝ哀　児竹
泥亀の鴫ふ這ふ夕ゝゝ那　其角
鴫細ゝ風のあゝゝれゆふ哀　湖舟

鶉（ウヅラ）

鶉の行方ゝれゝ山　女の哀　李圃
ひとゝゝゝの日和をゝゝる声　荻子
居りゝふふ河ゝ鶉ふる小菜畠　支考
高土ふに鶉の啼日や雲ちぎれ　珠碩

鳩吹

淋しさの鳩吹ふくとうるゝ　野水
鳩吹や渋撰糸の蕎麦そうめん　珠頃
そこふくや太山ハくらき至下て　甫山

鹿笛

鹿ふえやそゝ毋と狸のたちつゝみ　徒元
うゝなうふて鹿よ笛ふくさんろ哉　大山

鹿

小男鹿やそゝきこえより此流を　其角
啼鹿を椎の木のゝ見ゆ夕ゝ　去来
北嵯峨や町をうち越鹿のこゑ　丈草
朝鹿の身好るひ高し堂ゝ様　許六
鹿の目れ初日にむうふ高根う南　李由

あそれさゝや日の明る山ゝ鹿のとゝ　万乎
番の火をゝゝまうふ鹿ゝや鹿の取　探志
行ゝゝをとて道なき鹿の苔向れ　不障
さひしさゝや尻うゝゝうる鹿のゝり　木導
鹿啼ゝゝやとゝと波うゝ声は跡　野坡
元山の杉をこえ世まり鹿のゝゝ　知足
尻をゝるゝゝゝ夜明の鹿の声　風聽
かんせゝゝ四足をゝゝる小鹿う邪　波村
わゝをゝひとふゝと変ゝや鹿の声　蘇葉
膝こゝ世て行ゝゝふ鹿ゝりみちうる　半殘
吹うふに鹿をうゝ山ゝ鳴ー　句空
三絃のさを鹿や絃ゝかいらうひ　季吟

行秋

行秋のあれさのみ青密棋　芭蕉

物あきの細くくをなるせとり　越人

ゆく秋よきるゑもなる袷ゑ素　牡年

ゆくあきゑ数める家のあじゑ　浪花

行あきゑ晩日のゑ社星の祭　その

物秋の四五日よりゑ藩　この角　丈草

行あきゑ　を敷ておくる風の神　東以

木さゑゑゑきて梢ゑら行あれそ　乙由

さーもさゑ哀是あをより九十日　耒山

冬近

冬近ー時雨れ雲もちくよりそ　蕪村

ものいゑゑ雲ゑ志ゑれん冬近ー　樗良

古人續五百題並發句集

冬の部

初雪

初雪ゑうけかくゑるゑ橋の上　芭蕉

ちん雪ゑ内ゑねさゑる人ゑ誰　其角

初ゆきゑ裾へとゑゑ白丁花　嵐雪

花とよむ雪ゑはきゑみゑれゑ　耒山

ちんゆきゑ節引て出る朝戸ゑれ　野水

初雪や波よ伊吹の風ゑ吹き　千那

ちん雪ゑ書紙ゑのゑく朝朗　史邦

初雪やまゝの草履あゝ降まて　路通
ちらゆきや松あらゝて菜の葉ふる　北枝
はつ雪や一面よ降る濃田の稿　李由
あゝ〳〵ぬ琵琶のくる日とそ雪と　山子
初雪を庵の角あもるふし　紅雪
ちらゆきや人よりの先よりのいそ　三ヶ
初雪も花石ちらの音さこの角　斜嶺
ちりゆきや人待市の松かゝと　之道
その法のは初雪買ん笠帽ら　氷花
はつ雪や森言ふいひし夢合　知足
ちりゆきや小阪よりの江り道　配力
初ゆきやるゝぬ伊丹の瓦ふき　朱紬

雪

ちん雪や人のありくゝと日のさゝと　楚常
松ゝれぬ雪と初雪ちらり未賤山　石周

雪こゝとも深ゝ雪む住居この角　芭蕉
ゆきの日や船頃ちの新れの絵　其角
ちのゆきふむひまおとくも人　嵐雪
強の中ふ居ゝ雪の山路ゝ　去来
ふりうへて山ゝ雪は窓　丈草
横堂よ穢せゝこゝゆきの門　支考
曝ゝ伽藍ゝのゆ戸えまひ　荷兮
十四やゝ海ゝまよし雪は門　許六
雪の松ゝ根ゝ知さゝき各下我　宗因

酒買ふあり子筆うせ雪乃宴　素山
ゆき降や若元の門を押しけり　支九
うさうさや雪のあ間山さくの山　九兆
車道さるなれ冬のあーさう有　小春
くらき夜ゆ物ゝけさうきは隈　二水
雪の江の大船よりハ小舟こう郡　芳川
り鳥森ところこさ雪の色　漏子
黄昏もるゝ所ゝゆきの多まる寺　所屋
ゆきの日やとれゝむさしの都雪　
夜の雪落さぬゆゆ枝さくく　下風
川越こ雪ゆゆ凄ーー雪の麻　臥高
笠の雪独首にるゝてきまるく　卯七

大雪や名色めうちの咲さくく　一髪
ゆきをさうゝ宿なれゝこそのりの侘　惟然
作りものてさくくれもせーー雪佛　一井
朝の雪降あくくりはるのーー　野坡
雪ふりゆ程ゆきうろ不二の山　智月
日枝ひとゝ前くよ垂る雪えれ　乙州
六条の豆腐は沙汰や秋の雪　吾仲
ゆきの日や笑うくえ子とり娶　程巳
益一雪ちりと形りゝり雪の上　土芳
さうふれーー雪はえ色ありとこ色　野水
峯ーくや鳴とりまるとと雪ゝふり　史邨

雪吹

長崎や濃田ノ相えん雪吹松　其角
村雲は宮式出るや雪吹の根　丈草
雁鴨を波ふうちぬむふくきうゑ　素覽
一下雪吹ゆりとゝしゝ馬の蓋　頭水
折とゝもゆまりゑ至極の雪吹ゑ　秋之坊
ちちこえんも同ゝ雪吹の雀しの那　朝叟

霙

霙ふもゑハかまえとり沈の響　其角
こゝれ降る音や朝餉のてきる迄　西好
りう仕兼へ朝水ゝみのひと霙　千川
それ霙の鈴ふり点みそれうる　正秀
初こゝて迄雪の闇とふ小暗ゝ系　蟬蘭
みそれ降宿は去まりや養の夜著　丈草

初時雨

旅人と我名ぼ是んゝ川しゝ迄　芭蕉
河赤毛の鳥帽子の上や初時雨　去来
新菜は盃根の雫やゝ志ゝれ　許六
初志ゝれ野分ふ骨のゆるゆゆ　西吟
居住ゝけの雪もゝゝや初時雨　浪化
ゝゝ志ゝれ香打海膳の附もゝそ　言水
雷落し松と拾丹はゝ志ゝ徒　丈草
芋喰の腹ゝゝふじまり初しゝれ　荊口
暮ゝゝゆゝ一チ羽鳥やゝ川しゝ迄　調竹
米川雀七きゝゝや秋田の初附雨　嵐雪
ゝ迄ゝゝの山をゝゝゝや初志ゝ迄　希因
初しゝゝれ眉ふ鳥帽子の雫ゝれ　芝村

時雨

草まくらふ犬も声かれ鉄砲の声　芭蕉
客人やさらふもとゝろこゝと時雨　宗因
宿借よ夜雲の借やちゝ是ふる　来山
釣棚は夕日をかゝる北しぐれ　甚角
幾人かちられかけぬく瀬田の橋　丈草
松風の里を教るちゝ是この那　嵐雪
宵明となれば度ゝ志ぐれふる　許六
食時さゝ一合ふ村は時雨うゝ　去来
ちられはゝ雲ふゝれふれ入日うゝ　枳風
渡ゝ手をうり養ふる時雨の那　傘下
蔓半弧ちふねとゝ鳴ゝ時雨切　風牛
畠ふゝ鳥も山ふる志ぐれうゝ　園友

松山やちられの足はそゝひ　利合
蒟蒻の湯氣あゝうゝ時雨うゝ　猿蓑
牛馬の臭うもなゝて志ぐれ志ぐり　浪化
ちゝれ孫ふまゝ松風のゝ志ぐれ　北枝
鰯燒うゝも伏見はゝしゝれゝの家　卧高
時鐘は下ふりのゝゝと時雨うゝ那　淡玉
宣嘩より特は明ゝ時ちられうゝ　車庸
食堂ふゝゝゝ色歸なり夕時雨　支考
板屋や馬の森うゝる小夜志ぐれ　史邦
小夜ゝゝれ隙の白を挽ふみぬ　野坡
家ゝふふゝゝゝゝ森は志ぐれ　吞水
かゝふ舟の黒津ふのゝる時雨うゝれ　探志

霰

松菌にはらふて帰る志らゝ星この条　三岐
瀬や志ゝ〻の下に星のかゝ事　牝玄
いさうひふ稲のなき市の附西哉　正秀

雑水ふ琵琶きゝ軒はめられる　芭蕉
海へ降ふあふれや雲と浪は音　其角
老武者と指やさゝれんゝゐめられ　去來
飛うゝ伝岩のめゝれや窓のうち　丈草
志ふ浪とつれてさゝしれ霰うゝ玄　重治
冬風のかゝとゝもゝれ降ぬこの那　句空
稲こゝるの山田ふらゝほゝらゝ星うゝ　正秀
景云られまゝつゝあゝれのりゝう哉　堅翠

氷柱

丸合羽はゝつゝさゝゝゝれ霰この角　知足
森添く野馬志むゝゝれうゝ　伸風
むゝゝう帆ふ霰うゝ伝月夜うゝ　暮手
なゝゝれ降日や奥店の鱠のいろ　卧高
下志きゝり花とうゝ妙ゝゝ程ゝう系　松翁
味ひかゝとを鮒壽ゝゝねゝゝれうゝ　丸北
盃や傘をさゝと好ゝゝゝゐゝれ　宗因

伊ゆゝゝふ長みゝゝゝゝ氷柱うゝ　鬼貫
風ふ吹ゝゝはゝらゝにさゝゝれ根この角　一桃
竹折て伊ゝゝふ志ゝゝゝ伝ゝゝ系　夜舟
花風の義ぬきて見る氷柱う那　西鹿

霜

きれそこそ荒ら江まうの霜は蕉　芭蕉
霜朝はあくしやつくも生姜味噌　嵐雪
一ッ茶や知らぬ人の朝の霜　支考
初霜あれとおうの霜を船は中　其角
はつ〳〵もに行や北斗の星の前　百歳
山鳥の尾よりかくるや夜はしも　曲翠
朝と子は寒夜をうらふ野ちうる　溪石
後の跡ふむ足のさし今朝の霜　野坡
霜とこの水そ形れらし藤の葉　影棠
かう是家や霜さめはふると無の葉　路通
はつ〳〵もは涯ふとこれの草はいろ　丈草
里人のうらりん紙搗のしも　宗因

氷

若焼や裾掃の田井は氷　芭蕉
舟あてくきやく氷る霜見う那　枳風
滝幅や氷は中乃いさり去　其角
我者を蒲きを永なり月き氷うる　亀世
紅麻ふ結ふや氷は下をみち　氷下
池の奥あ〳〵ヒよ角てぬ氷の角　知足
ゆく道は音おり〳〵鶴きとうり哉　孤白
五畳ひとう氷のうへのあられう船　青人
枯芦ゐ氷成のとを夜しれう素　苔翠
刈株の足あ三さふ元とりかふ　芦角
はきうりて松葉あかきりうと氷　除風
芦氷や星のゐ風うるまり水　素行

凍

軒凍て初くるや鍛冶う槌のおと　思秋

いとはけい凍つきなとうふ毎の風　秋之坊

冬籠

荷もなうて祢やかうきみふは西　亀世

下京や雪積うへの夜はあえ　凡兆

氷室

汗出て谷ふ突迎む氷室うる　冬松

海嵐腸は蠹埋めうき氷室哉　利重

雪車

峠より雪車ひきおろす温末うる　嵐弾

馬盃よりそうり引出す且この車　一井

使座雪車や先ふ立うる座見拾　不玉

神無月

神去月如くうう雀のまううきき　甚角

旅樽筍あけて名ゆうん神去月　未山

夕陽や流石ふさふ小六月　鬼貫

うう家の佛うふとしかみる月　任口

神無月火とりと称宜の変た哉　言水

十月やいりくへ雲は蛋みゆく　幽也

明暮は大根うましい祢ぎ月　泊徳

菅穂る田面ふ神去つた　氷花

元山や化ふかみなう月　素覧

神ぎう月豆腐の奢るめうしる　枚風

ひと志きり閑もあうるし祢去月　朱絵

宗任ふ仙うふせよかみる法式　芸村

小春 [illegible]之

風もなくし息はく小春この郷　野水

大木に小鳥啼日や小春かな　嘯風

痩藪に茜根干したは小ちるかな　衣吹

小海老ある室や小春拾ふの文　潘川

花の木に卯の花の小春哉　光彦

園栗は小春に落る瑞山この郷　言水

小ちは風呂も七合五夕かな　蕪村

海の音一日遠き小はるかな　曉臺

霜月や日まぜにしけて冬籠　去来

人影も寒月この嫗し比山　甚由

師走

後ひとり師走の野辺梅のさかな　来山

うちひとの落なきに除くる師走かな　支考

ものの賣が声きくうちにせかさるる　荷兮

戒しけもなくて森すまぬ師走哉　乙州

隣のまよき分をするもせわしかな　岱水

煎茶に飯はふ入りし師走かな　胡布

せん湯のあきらけ清きせわしさかな　惟然

碓よ雛の月踏む師走この郷　汶村

浮世安よ驚るも蔵さるせわしさかな　卧高

師走ともせわしく秋は長さかな　挑隣

門松をまつまで師走のあかつき姿　里東

冬至

公おいたちの朝日冬至この邦　貞室
門前の小家も祝ふ冬瓜かな　維舟
書紀貞享故園よ遊ぶ冬瓜哉　芭村

神送

落るものと考るふるさとし神送り　鬼貫
市子寄てさびし死影や神たくり　去来
雑水の名てふきし神たくり　紅朝
吹上原空よ木の葉や神送り　秀川

神の留主

家々の留主居なりし大母しろ　其角
装束は廉も倒さね神乃留主　枝風
神の留主ちとおり人神のるそ　鬼貫
駒犬や勝も寄ちと神の留主　荷翠

十夜

十夜鉦明日は納豆もらひけり　言水
せちて十秋仏お待ち九十九夜　蝶羽
九月夜うふ月夜うまき十秋うま船　壽仙
十月は十の代ふと十夜この南　汶村
ふる鳥をたらうく深む十秋うま　希因
祖父ちゝの京ふもちまき十夜哉　乙由
あるたふと蒙もたふくと十秋哉　蔦村

達磨忌　遠忌

達磨忌や壁ちよ向くちゝ多ゝ別　来山
ちうまま忌やりふさう食の一ヲ文字　史邦
遠忌ふふまくく素は羅うま船　梅葉
ふゆうま忌や蒙釜の沈も新法師　希因

侍命漆

系綯頭切侍くしろの御命漆
侍命漆や顱の青紅彩比丘尼
おめい漆や帝衣の上社麻そうま
稱ろろや鼠ちゝせと日蓮忌
侍命講は孫數ふまつる数ふ丸
おめれかう上戸も餅法一座ろ角

芭蕉
詩人
奚、魚
何之
木導
汝江

御取

ろ鼻ふ誠こそ色ちり侍ろ古し
むとり幾まろ左り庵ふ松社坊
附酒ろる空や八百やのおろ越
玉ゆふ見百人前そおとろこし

千那
史邦
汶村
養浩

蛭子講

行かろこと家ふなろろ蛭子講
夷講我料理しく ろろね彫
大酒や三日昆ろろとろこと漆
蛭子漆ふとゝふ暦ふ祝ろろ

去来
曲翠
昨丁
利合

暦賣

あさまゝやまゝこすす月の暦ろ
指くゝやろれろろしき暦ろ
こよみ賣月日ま暦くゝケまろ

来山
孤屋
涼徹

御火燒

侍火燒の盛物とろろむろ烏
御火燒や鍋や鍋治ろ侍へし古ろふし
侍火燒や霜ろろくし紀京の町

智月
桃隠
芝村

ふんと祭

吹草まくり月代青きあるしられ　定雅
客人や水仙草の小磬を伊　史仁
口焼やぬいとまろりの酒おかん　竹戸

神樂

おすろもなくて身ふしむ神乐うれ　北枝
ふるうれや神樂拍子のかくうう声　路通
さく鳴か五さの機嫌やい世神乐　宗因
わりゝ絵き神樂乙女の化粧ゝ　望一
乙女さは火神迎ほ神乐うれ　亀翁

里神乐

ことゝうねちそ貴うれ里神乐　之道
いつゝむ氣や童ほたゝる里ゝう　亀翁
絵賃馬ほ夜ゝ明まゝの里神乐　和尹

鉾和

長唄のゝうめ鉾ほう絵ゝき　芭蕉
ゝとゝく集さうめゝ鉾ゝき　其角
物ゝる〳〵門ゝもゝる〳〵と絵ゝ　ハ未
ゝふ門は竹ふ墨ゝやゝち却き　文草
狼のゝうゝと吟ゝ一鉾ゝ　野童
朔日は絵ゝられ形りはちたゝき　栄雪
世は中ハ足より寒ゝ鉾ゝ　尚白
ゝく声の凄きゝもゝふとゝち却　乙州
鉾ゝ浮名忘れそ絵ゝき　之道
ゝよゝよ下絵ゝ雨の鉾和　氷花
食付やゝふゝ不ゝ絵ゝ　路草
世の中をゝと語やゝちたゝき　数子

芭蕉忌

瓢箪の内も空也を祈りつゝ　貞徳

ちらつき古うもるゝ空也堂　恕貫

弥陀仏とゝなれと哀や鉢たゝき　蟻道

芭蕉翁十七番目切打人信法流　史邦

ちる芭蕉品や去ん倚空を采買ふ　攜良

佛名

聲高ふ佛よ数なり霜の星　耒山

仏名や鐘頭の香けうを煙り　洒堂

大師講

大師講ゆふ門前を乾休ふ　揚花

うゝ〜ちるを法華穂を焚や大師講　可有

酒飯の欲洗ハいつゝ寒ゝ念佛　其角

傾城もいとゝ寒ゝ念仏　奚魚

ちゝ念佛ゝれハ出入の大工なり　丈町

寒ゝ稲うり場る庵も水仙ちん　康乗

かんゝ念仏寒ゝ仏ゝ法ゝなし　水山

寒念仏

人行や木の葉かゝ寒る風の道　素堂

蘇より足さゝりよき木葉ゝ角　松風

おちにけり木の葉にあゝる帯哉　風国

蝉の殼つゝ葉ゆく木葉ふう那　魚有

あゝれあもつゝみて落る木葉ふ水　四睡

炭屑ふいやしゝかゝふさる木葉かな　其角

木枯葉

落葉

庭ハおちゝ葉その外らゆき所なし
賽銭を投して拝ふ蔦葉ふうな
私行の白立ふ高ふ蔦葉ふ那
泥洗うふおちそなりり袖のうへ
衰うの蔦ふあふうや角さより
白ふ紅流まてもさふき蔦葉ふれ
一茶法師柿の葉ふうふ敷むきり
鴨の帰うう栗のおちふの那
這出くおち葉ふねまる壊う船
此夕辺うちや蔦葉ふふさ〳〵ふおと
生墜ふわり此門のおち葉ふうふ
寒山と拾得と言るおちそう那

宗因　去来　丈草　泊徒　荷兮　本導　一髪　如行　跡変　句空　如元　許六

凩

凩ふ出吹きとうふ枝間ふ南
こうふしや瓜ほうさ松の鶏　芭蕉
木からしや川田の畔の須賀ふ　野坡
木賀や巻中吹ふ牛のと石　惟然
ちうふふふ道いそきてや頬つこ　凡竹
凩よりの生おそき入湯の系　幽泉
こかしや笑まもふそと散もせそ　荊口
木枯や夜中ふてる茶の出て船　智月
ちうふふ江食堂の鳥ちうふ　里東
才嵐の雲より落る木の葉ふ那　草士
凩の更ゆうふや蹴ふ生ま　左次
ちうふしや晩鐘ひとふ馬十疋　甚徒
楚常

冬木立

こがらしや紳うの奇紀山のきれ　甚角
木枯や剣を吹ふとるみ山　去来
風のあうり形やとゝ殿やなる武　太草
あうふしや旅のこゝ動く燈の影　西邑
風もかしまよしうゝねゆうきゝ系　葉言
木枯やいろことをるふに枇杷の海　牧童
見うりを風の吹くらん冬木立　彫棠
冬の日さゆるしときうる木立　車庸
冬木立ゆしやゆのたゝとゆひ　甚角
如くやゝふわやゝ紅冬木ゝち　奥口
谷入ゝく香ふ鶯ゝやふゆ木なち　蕪村

枯柳

川越て赤き足ゆく枯やなゝ武　鬼貫
柳おゝく弓ゝ昔の盛清ゝり　甚角
うゝ見ゝて有ゝもゝゝゝゝ柳の角　その

菊

色落ゝ紅葉を散ふゝと風の声　負室
附酒ゝもゝふゝて紅葉のちる日名　樗良
詩や歌やゆゝゝゆちり菊紅葉哉　風狀

帰雁

こゝゝゝしよ白ひや陸けて帰り雁　芭蕉
蚤虫のゝゝふゝるゝやかゝりち郷　昌碧
山茶花ゝりとゝりひふゝゝ帰り花　車庸
ゝゝまゝゝゝ青き蕊ゝもゝり帰花　素秋

枇杷花

仏の木と問やさてもなつかしの花
物凄やあふぎおりしの夜やくらの
面とり木の餅よ名にしかくり花　素山
鴨のとふさふさもしらぬ人とさ　鬼貫
源草のさくらに白しこのくりの　樗雲
　　　　　　　　　　　　　　　窮風
　　　　　　　　　　　　　　　秀和

皆人の白しをやしの枇杷のえも
窓添く待うつ音やひとしれぬ　鬼貫
賢女あふふ枇杷はなのあうやめん　舎羅
さくれしとやふてさくや枇杷の花　一烟
琵琶くと松風ふくや枇杷はなる　野坡
枇杷の花多ゆさとあとと日暮うつ　二川
　　　　　　　　　　　　　　　芸村

山茶花

山茶花ふ叢さうる多るも霜あ　我泊
さくんあや蝶のちくふねもちうつ　徳
山茶花やさくうふりさと庭の雪　李東
　　　　　　　　　　　　　　　裳葉

冬牡丹

雷の後れうそさやあ花八ッ手　百里
こくふふ咲くえせ〜体八ッ手哉　林蔭

椿

草木ふとそ病ある冬り冬至椿　暁水
日附斗のくるひそあり冬牡梅　汝上

山茶花

うりくく交体中や冬ぢうき　鬼貫
されそこそ菜入ちく浪ふ色椿　言水
火とりて義日ふうりね冬椿　一笑

冬梅

ゆるうりと森くうる在西や冬の梅　惟然
一さを折も二さをねもす折て冬の梅　扶摇
雪霜の骨となりてや梅の花　支考
鎌倉の傍こそうん冬のむら花　露沾
内義の吉酒を折るや冬の梅　其角
笑言は手はきもをしや冬の梅　希因
冬の山えきのふくちりね石の上　芝村

冬牡丹

あるうまぶかりかとうの冬牡丹　維舟
大和も数ある家や冬のぼたん　西武
ひらくくと空の風の冬ぼたん　鬼貫
深上ほ土の黒さよ冬ぼたん　杜旭

冬仙

水仙や門をいろどる江の月夜　支考
小坊主の上下ぬぎうり冬仙花　尚白
冬仙の花はさるさの日ひけこの糸　智月
立ぼけの日影ぬるしや水せん花　素牛
水仙は北をいくへのなみのあと　尚白
煤萱の中よりもろし冬仙花　嘉川
きいせんのほつれかゝるや朝嵐　斜嶺
わく霜の敵を味ふこゝ水仙花　乙州

枯尾花

冬籠の後家引けうり枯尾花　蕪村
中くふ根はよくとりぬ枯尾花　蘆臺

茶花

茶の花や鯨位の水流れ　野波
ちやのそこのふ炭焼家をそこふ寂　巴風
茶のそこふや老をこ二きよ立られ　彫棠
茶はたちふ豆眉初とりを添こう那　紫雫
ちやのそこのや蕾の子は法ふし　浪花
茶は花や経をこけくる星月夜　亀世
ちやの花い物の序よこうるう　李晨

寒菊

寒菊や古つりとなる座敷　上芳
かんきくや孫ふ摘し軒の陰ま　諷竹
ききくは咲くなふあるまて作り　卓袋
うん菊や砂ふ四五ふん岩の跡　野坡

石蕗花

空州の姿ふこうや石蕗のこ那　言水
手水鉢あふひ流しこ作れと花　俳表ふ知
下苅の藪寄麗ふり石蕗の花　養浩
井戸神の結ふうけかり法とけ花　種文
咲ふこうも岩ふてあるを石蕗の花　蕪村

冬桔

冬こうれの木は間那ふん賣ふ一き　去来
ふ西坊や海を目前ふ滝見くり　亀翁
冬かれふ風の中をこふ花我　洞雪
野西ふこと馬も有ふね亦行山　新吉
冬こうれやまこ家ふこうけ一木のこうれ　文丸
ふ西こまこや野ふ立りのふ鍬はおと　芦錐

枯芦

枯芦や新波入江のさゝらなみ　鬼貫
かれめしや蜻蛉の稽を捨小舟　蘭水
青さゝ小川辺の芦は枯ぬ　曉堂

草

うぶ一

志のふさ人枯くく鎌うふ舎りう船　芭蕉
菊うゑや冬さゝく薪の垣ゝ　杉風
菖かれて壁を覆ふ蔦うゑ　琴風
枯芝ふまゝ殘る志のふの郡　巳百
小坊主も旅人うれや枯ゝき　配力

冬野

捨人やめゝうさうふ冬野ゆく　来山
まも出ゝを物荷ひ冬野哉　甚角

枯野

若松の横荷ゝそむる枯野哉　治德
月日をもうゝ除ゝうゝ月日　智月
大腰ふかゝし投出ゝ野ゝ郡　琴風
世子や枯野ふ常乃支ゝ　園月
志ゝうゝとなる野やかれ野のあゝ石　玄梅
かゝしはのゝ枯ゝ新迎枯野ゝ　呂丸
我ゝ丹ゝくゝ志の形きゝ冬ゝ　不角
松苗も枯野ふ日ゝ川嵐この郡　招風
寒ゝ屋ゝ志ゝ冬ゝ枯野ゝ　土芳
塚ゝ人枯のゝ志ゝ冬野中ゝ　和歌
川筋の遠ゝも曲ゝ枯野ゝ　岩翁
白根へと雲ゝ冬ゝ行枯野ゝ南　秋之坊

大根曳　乙由
芸村

足ごろう稽古のこりて拵はせうぞふ
芸亜ふ道あふりまてくかれ世ふる

日日にさ三井寺の大根曳き　詩六
今様もそふぬ淋し大根曳　風國
家物ふ法ふ人をとるたや大根引　李由
鉢巻をとるとて寄荒そ大根引　野坡

干菜　甚角
奥兒

玄賓死世ふこるさ函ふ干菜喪
うもふふて菜を干拵を始ふ函
ひとり〳〵や一字の題のまを草　百花

葱　蕪村

葱のきふ人拵附古家ふ　この菜

麥蒔　鬼貫
立笑

麥蒔や妹ふ湯とまう用頼ふふり
むきまふや野芝もある日に霜月秋　北枝
ふふ霜や麥蒔土のふふ　秀泉
麥をまふ人ふふ赤ふふ　沾徳
みふとの麥まれのとを麥代

鶏鶏　乙州
沾德

紀父さ人起まふ法さきふみそさふい
鶏鶏燒火ふ通ふ朝戸ふ　葉芳
木ふふ〳〵や窓よ晩通ふそさふい　惟然
晩ふ〳〵るプや磨ふ法みそさふい　如行
ふふそふふい家ふふきふそふれ書　祐甫
そふれ雪ひふふまとふふふ鶏鶏

千鳥

清水崎の園をこそよそや帰るなる　芭蕉
昼の月鶏の初ふり千鳥なり　素堂
公武ら釜の湯ゆふ浦ゑとり　甚角
かくれ庵に馬のくそゆく衛ゑ　傘下
炉の炭を帰るあるる茂　桃先
うちも移ぬ縄治ら火書し小荻衛　泥足
冬の日を九小くれてやるく茂　洒堂
家は新江よ入ときや帰ゑとり　野坡
葬の火をふるゆるゆ奇や渡ゑ鳥　李由
松を生はとけて走ゆ村ゑとる　素仙
朝鮮をえてもあるく友千鳥　村俊
船よ焚火ゆ声ゑ茂ゑ　亀洞

鴛鴦

ゆめのうてりとゑ江やゑとり　貞徳
ちき浪ゆ浮桶かるちとり　冬柏
たくるくや風の吹まるむゆゑ鳥　迷亭
次を引牛のこくむや村ちとり　苔浅
傳出しハ玉ゑるようやむゆゑ　泊洲
室君をるもるくし小荻衛　合志
小夜ちとり庚申待は舟茂取　文草

をしのとうて物ちるなる小池哉　尚白
ゑるれやゑあゆ鴛のゑかみ　山川
鴛の女は世をあるりする茂ゑ　蕉下
をしうりのはくやゆくと清水　文里

鴨

海くれて鴨の声ほのかに白し　芭蕉
霜腹は森さむくや鴨の声　丈艸
明るや城をとりまくかものこゑ　許六
鈴かもゝこゑふり渡る月寒し　嵐雪
菰かれて喰物遠し鴨の聲　野坡
蘆葦のそよいでみゆる小鴨哉　程巳
ゆけ汲に身雪ちらしかもの声　卜絮
鴨飛て一もち長き寒かな　氷花
大手や難波入江の鴨の声　春箋
かもの足は流るゝもあへぬ氷かな　宗因
鈴かもや脊中に雪のとゞく程　支幽

水鳥

かれ
はふき

水鳥のおもたく見えて浮にけり　鬼貫
ゐるゝ秋あらし短き山田の家　湖風
こ川より汲を仰をおそろてそ　几峯
水鳥のくゝ乱やいろく浮ところ　揚水
あるゝに餌を飼傍の乞食哉　石間
水鳥の朝日蹴ろうはうろりかれ　由之
ゐるゝも森入こゆる金五日の海　路通
水鳥や舟に菜を洗ふ女あり　蕪村
かいつぶり浮れてすける片男浪　亀翁
荒江や竹篭をのぞくかいつぶり　汶村

暖鳥

荒一重うちぬやを食のぬくめ鳥　其角

游森や充引よりもぬくめとり　許六

暖鳥のしうふうの風こそ強うなれ　尚白

むくるこゝろ人をとがらうぬくめ鳥　素堂

鷹

鷹おとろへ先はけて蝶しらこと濤　芭蕉

鷹の目の澍より出る光り角　苔蘚

鷹の雪の雲ゝ枝さうやけ〳〵や鷹の声　子英

木がらしに吹とられり鷹の尾巾　桂夕

鈴ふるふ鷹に晴るる尾上うな　李由

くれるおの鷹は大緒やたゞあられ　冬市

胡市

鷹狩

鷹狩の威を見る鷹の腕哉　亀翁

御鷹野ゆとりとうん七おうり細代哉　李由

鷹狩の跡よひきうゆ蕪の角　蕉笠

うう匠ハ鼻のかまれねをきうゆ　乙由

鷹をそれ七むるゝ〳〵月とるる歌代　曉臺

夜鼠

犬曳て豆腐狩ゆうり里夜鼠　其角

我屋ゆ月夜ゆうゆ秋鼠哉　工齋

秋鼠や犬のとるゆる塀のうち　苔村

木兎

生つ向ゆ法木兎ゆ山路哉　子英

木兎ハ眠るとゝ鼠をうゝ是ゆり　才残

冬の鼬　許六

綿帽子の糊をちらつかせの鼬
百年の後なき人やふゆの鼬　肅山

冬の熊　嵐竹

冊波路や冬熊打も悪右衛門
冬熊の森首ぐらでもまくふれ　山店
そち巻や冬熊打の九寸五分　史邦

冬の鯨　猿雖

おそろしき鯨たちきる音の月
逐ひかるる形もなくてくら突　逸守

冬の羅　和及

ぬりたけや奥を火宅の一つ羅
羅や夕日ふのそく奥のつけ　如空
ふり捨て芦浦領の濱年貢　史邦

冬の代守

冬の代守　甚角

冬の代守
世界格子かけてや宇治の冬代守　素行
裝束の山ろけいつとあしら冬代守　正義
冬代木のゆるみやそるる氷ろ有　不角
ゆふ風やあらかちみてあしろ抗　何之
川はふや声吹流をあしろ冬代　其徒
夜の雨仕合いうあしろ冬代　鞭石
ふを洗れて秋の冬代ゆ裏狭し　心水
冬代守宇治の冬る舟とろろ　許六
あしろるまろ冬ねやち掛火打　乙由
冬代守大根ねとそとろあろり　其角

海嵐 生海嵐

海嵐ふかもむかしかしきりや独行
打浪よりをきをうちたるまとろ
めつゝじと生海嵐と蛾やとの夏
菊藜の角むかしとは海嵐うの系
ひく汐よりはれてをうしきうきこれ
汲汐ふちろひ入をきき生海嵐うの角
はちり陸の海へうけてをきとうる

嵐雪
車備
俊彼
左次
莫陵
利雪
希因

行をゝして見五湖菱坂の寄波使
貴坂より軒の松風ちらふなり
ちり川高や坂は吸りの陸うふき

素堂
曉臺
千州

蝦蟆 カキ 蝦蟆

遊ひきねふく弱うを稼て七里まて
河豚のくふふのゆとりや下川原
盗人ふちひしもらんふくの銭
ちれてそいとく横ふめてこけれ鱸
蛙くゝうり仏よかくて河豚汁
鱸のゆや仏をふくれくるを行
今さくふ弱くれて嵯うふ蛙声
貧ふて平死ねうとおりふ河豚汁

芭蕉
其角
去来
牧童
如泉
八橋
氷花
斧卜

鱸

鱸鱸をふりきけこを厨うれ
のへかうや小ふりうれとも二人前

其角
史興

鰤

鰤のはら腐し一文箱の入る程ほしは立や次第ふもとり詠丹波鰤　来山　楓子

乾鮭

ちゝしの乾鮭買ふて安いりのからさけと呼りくゆくやあふ角ちも扣乾鮭うりをちゝんちり　鬼貫　雪也　馬莧

藥喰

ちのいとし舟をちうふれく茶ふゝ禅僧や腎うちう人のくちり食客人ふ見物させくくをゝゝくちり食罪科もなしあう新ちりくと五徒をゝけり茶喰人　来山　芦本　禅桃　史邦　芝村

住むさき

葱しろく洗ひ立ちゝ体きさう那火いけ魚斧戸くくを〳〵竈の茶正客の行儀くうきねをけうちふ左ちゝふ多賀のる居の寒き哉膝ふし祇けくあと出ふをけこの有夜ちゝ色しの脾胃のたゝちゝ寒代り雪あふれ公けうるきゝふさ の赤蕎麦切ふ吸ちめもなゝ死をき哉さくふきヨをちのアきむし烟草切当帝木にをいの藤鉄のさふさふれけくふいのふ水あひくく居る馬う那ちゝ紀ちゝに沖の雲こる寒き哉　芭蕉　去来　野坡　尚白　嵐車　千川　夕菊　利牛　千那　游方　魯中　捨石

小屋風ふ葉を引かつ紅葉をさそふれ　斜嶺
植竹ユ川うせさゝふ〳〵道の嶺　土芳
あゝめ〳〵体読の鳥の声ちこの有　九郎
霄自のあゝ〳〵と明るさゝふさうれ　卧高
さゝふけ夏八稲ふ穂ふ稲を寝ふ　支考
寒ふ夜を裾ふ敷寝く旅藻ふ　左次
ふと刷毛ふ裏絵の竹杜ふ氏　汶村
晨明の雲ふ赤みたくさふたふれ　魯可
桐の葉ふ八葉みゝ〳〵をし内をみ　野明
先ふ望ふよりたきかふ寒きふ　李由
ふる杜毛をまもゝ〳〵山ふさふさ哉　柳玉
あゝふふ冬の日向の寒さこの春　鬼貫

頭巾

目くらをきます歌巾の浮世ふ素　其角
山里や頭巾ふ人き人も形し　観水
かゝれ家や元耳ふけて角はきん　専吟
節季ふふ中ふなふ人き頭巾ふれ　雪芝
抓針はれけくもくはきんこの有　之道
行雪の頭巾や耳を明けて居る　鬼貫
あふ雪もその雪の雪近も頭巾ふれ　朱紬

足袋

古足袋や月わとの宿はきね配　素堂
揚屋ふ足半たゝまとわゝを敷持　秉山
雨ふふ足袋やの生子の寒き我　毛紈

冬

籠

鶏の尼あしたやふるさとのり
捨季や木芽の堺の冬ごもり
冬ごもりいさりてるひめきこゆ
下帯に竿にかけはく冬ごもり
そこいやや廣間のゆめもふる竈
ふるあるり眼のくらひまんあり窓
汁鍋の跡むくうやふるこもり
松風やいろもひとり炉ふる竈
沖の漁もるるや静ふるこもり
鳥ふ羽のゆくとしきしふる籠
大儀して鍋釜ゆめとりの
人沈吐く息をなくらん冬ごもり

丈草
許六
彫棠
木節
恕風
朱紬
圃友
荊江
沙明
配刀
李由
千那

冬衣

七箇寺や鹿ふなくしてとり
先社をはしらふ雛人ふるとり

本嵐
几峯

祝ふ天下の冬衣哉
紙ひとつかつてきけうるふる冬
旨てうてい夜の冬衣もかりもり
はきこもりていまく京ふる
嵐退くく綿つくの冬ふるる
あつ冬衣夏の泥ふまと凪ひもり
蚊のまくと紙帷もありふ冬衣
麻かるるふるるの冷ふあまる
沙弥律師ところくくと冬衣哉

嵐雪
杉風
丈草
尚白
蕉下
千那
惟然
子堂
蕉村

蕭園

蕭園をとて蕭ふるさとや秋山　嵐雪
我ふるいえ旅のさかこう秋　治圃
古人ふるひと夜ハふける蚊とんう　蕪村

紙子

ちゐ桃の木の葉の陰や漆紙子　宗因
紙子ぬいてよりれと火燵の走り炭　丈草
南天よさらる音とは紙子の角　木巵
さてこかしくなるふねとりえや古紙子　正秀
人中ハ我まこと恥るかこ子うの秋　湖春
腹入りをきけハ隣も紙子うの　二暮
ね位屋や後ろの紙子の巳形　景常

火燵

はくとりの、けまる巨燵うれ　鬼貫
ま夜中や火燵隙ゆ七月のかけ　去来
下ゆをあらりてとうれ行脚うの秋　太草
はとのとと貌もあるふね巨燵うの　嵐雪
腹ゆや巨燵燵とんのさあねうち　甚角
新して火燵ふ森入ハ童この秋　岩翁
灯のうけふ赦ちひうるあうれうる　奥兒
森ちううハ咄ちふ遠き巨燵うる　松翁
宿ふへてまうちうち臭きちうれこの形　我峯
伊賀上のふ別ちわる巨燵う秋　氷花
燵物ふ上より伊ゆるとふうこの角　竜翁
ふ一合てちうれふあうせいうち旅　之道

埋火

小芝流よ高くきえまる巨燈こる　李由
見臺よ鬢結うちの出くれる　毛紈
自由さ〻や月と追ゆく垂こそ　洞木
りのもえ〻い火燈をあけていろるん　舟泉

埋火や ちくねいのちふ息かけん　来山
うたこ火の南をきけやきのくに　甚角
埋火ふ根ゆくんいるを夜明う有　汶村
うこ火やちられて烟る程ひとろ　風渡
うりみひや学る鐘をうちつめて　宗瑞
埋火や孫くめへ考る隣のその　蕪村

火桶

霜のめ〻ひ捨こ火桶ろ茶　芭蕉
さんるそと悟れ火もけのあこうき　洞竹
朝ふ和を火桶よのこと考はう邪　漁山
花ふとね今郭しもるろ相火もけ　雪言

火鉢

黒塚や法ちひ女のこく火ちち　言水
うこ紙こう圓座こんね火鉢代　岸口
いま知ろ嚴高ここく火ちち鉢　順水

湯婆

湯婆こ駒の出さうみ手つ死れ　凉菟
ふんほうこれ羽こうそなろれ暖　雨吉

冬椿

山畑に日みのこしてさかへ
そかまん藪ふ椿の多いしら
山里ハ見主うとんてを椿
妹ゝ子に設越ゆきしをかまん
唐船ハ通ひハ多ゝくふも椿

去来
珍碩
湖竹
和及
涼佛

燒畑

炉開きの日代ちゆしゝ地の土菜うね
うゝふをや鼻をうゝ人て雨を笑
炉をゝきうや淋代よふ合のゆ

嵐雪
子葉
其角

麦蒔

ちふ麦のよるけちまりや麦子餅
三月ハ月のいくふきあとを麦子うれ
子にあきて出しに三ツのねの子我

宗因
其角
青丈

口切

口切の茶や常盤木の若みとり　重圖
くたきりや講時煎を茶かしち　正秀
はきりやのしゆの裏の貧乏さ　西堂
はきりのきゝくおもひ年日本橋　水花
ゝを仏や小城下ゆふきゝなゝ絲　其村

納豆

納豆とるときゝゆや嶺の雪おろし　丈草
砧法きゝ又の森さゆや納豆しゝ　甘角

子始

数のゝすけかとゝもゝえゝゆ年始　之圖
師走茶ハ一日ゝゆけねゆゝ先　路通
ちとしゆ又ゝ梅ゝら柳ゝら　南白

火鉢置

かみかきうや守ふく後の曉ひとし　和及

襖

襖ぬぎを娘の子おもてうら白　甚角

うのみおもふまはうまをはうまを見や見身　六亀

爐

爐の眠り浪うきうきう紙須広明石　言水

うの隅ゆ身を酬の神とらうれん　秋之坊

淋しけるうの足のうちも居を　山蜂

炉とめつ法命はれるし摺の蟻　似竹

うの友十鶴ちかまうう法翁面　日下

摺

うつろしや摺ふきとる煙烟草　亀賀

懐ゆや月雛をくきく摺の書　立兮

面白の絵森や摺を夜ふふう　巴丈

春ちう摺ちうみうる菜畑哉　亀翁

元日ろをきの絵ゆとし夜の摺　秀治

雄子色ちるしうける摺明日　曉臺

炭

竈

炭竈し煙をねけハ猿の声　甚角

ちうみうにとちうう経よむ法師比　不欺

炭うよのけうりの搦や雲の浪　之道

ちうみ竈ゆにふまつへからう清ちうり　亀洞

炭ちゆ身ゆ身かう風の むさ　子珊

炭賣

冬かこふ俵をとみこみけん　宗因
炭焼や朧の清水鳥いなん　素角
さゝみの火さへ並ふるきんろの光かな　北枝
小野といふ名にめされとする炭俵　和賤
片眼のかねしや炭のゆめまで　佐徳
雪ぞ今朝炭のおとつれその内へ　詞山
炭ちらさむ音さへ氷る霜耳かな　嵐蘭
炭賣へ降行人に焚ふせく　文草
さむからうも面うなしかねか嵐かな　温故
寺々へ賣や宿ハひとつの帆かれ　心流

冬の月

霄の帆をあらそふもえんふねの月　其角
雪となりゆきかはし白髪に冬の月　文草
肝煎吹ほどさゝれぬりふゆの月　曲翠
襟まきに首引入て冬住居　杉風
岺よりや門賣あるくふゆのつれ　里圃
かさらふもつらむ簣の戸や冬の月　風国
わし舟の砂よきしるやふゆの月　素覧
奥底ぞ遠うれあそてふゆの月　里東
塀裏に桐の木さらや冬の月　朱紬
足ぶみもかふけて寒し冬の月　我眉
狼のかいずま高まりふゆの月夜　奚奥

寒月

ちはやぶる　寒みを月の光かな　土芳
あるかなきも氷の角をうるとかな　鬼貫
寒月や門うきさまの天高し　蕪村
寒月や四条の橋も我ひとり　蝶夢

寒声

寒声や白子かくれ川向ひ　牧童
かんとうよ行うね橋をそ阪灘北　行露
寒しとの山ねをそふる川ふる　知春
旅人は寒声ゆくや瀬田の橋　桃妖
寒さかなやあうね別れを隣りより　暮子
かんこうさい山伏村の長ばしみ　仙杖
うむ古ふる古宗祖の風の後の子そ　蕪村

寒の入

寒垢離

臘八

風国

作者不知

広くまとよ松ふくく寒の入
鐘の声いくしほ寒ふる夜の形　蓉村

寒垢離や上の町まで来りまり
かんこうよおのれ本国のうんる方　峯及

臘八は愚癡を一下日ちくもく
ふ奥き粥とうるや我ら腹　諷竹
臘八や八瀬の蕨も山を出れ　尚白
臘八や宵はあるうの述ひうの　乙由
　　既白

あらき墓の書紫ばたる蔵嘉式
眠をいとくとやせ苅干　本導
　　惟然

眠

霜月

霜ふりて[illegible]
梅さくころ[illegible]

羽紅
山川

冬日

生[illegible]の梅ふる冬の日向この方
冬の日ふる梅ちるみのを形し我

沾德
言聽

冬夜

冬の夜ハ[illegible]なる犬の声
[illegible]の目の切方や奥戸柳

勤也
珍碩

風呂吹

日[illegible]の[illegible]ふきとく比叡山
風呂吹や[illegible]の夜は[illegible]ハ[illegible]城
千[illegible]井[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]も哉
霍の毛ヶ風呂ふきこちの窓のり

甚角
琴風
午寂
圖指

節季候

節季ぬの[illegible]れハ風雅も師走[illegible]
節季ふりハ左りの耳ふ門の春
せつきのハ[illegible]せつきにのもひをの
節季ふに白うふ米をくれふちり
目ふかくれるもたやせ川きん
節季ふもたやとこるの徒ら那
せつきのや抱て通ふ関の前
おとろけや命佛元生せ川きる
節季のやきん天王寺御墓山
節季くやれ打揃ひ少く宿の上
せんきのの柏子ねうと[illegible]
節季のを酒のむ附を[illegible]ふ

芭蕉
其角
路通
田平
一朔
毛紈
露川
宗因
[illegible]く
紫雲
桃後
乙由

煤掃

煤はらひ已の朔ふる大てこの邪　芭蕉
畑中にすの静やとくふひ　嵐雪
とく掃や山風うけて吹き通し　夫草
いろ方へゆきてのそらんとくらひ　峯白
煤掃くや仏ゆつ足ふね家の内　月下
家〳〵や形ひ年〳〵きとくはふひ　祐甫
すくとくきの葵ふかく侍る数寄や我　史邨
夜の火や不破の関屋のとく拂ひ　如行
煤ちきーかーら紙はるむ湊このみ　黄逸
張いーとくとれ家の朝寒しき　知足
植うえふとく侍あつせやとく拂　百里
民の家もまとあくとくり煤拂　岸国

餅搗

弱法師我門ゆ面せとちのれ　甚角
餅搗やあるりかくれる鶏のとや　嵐蓼
一とせや餅はくく白のとを足ゑ　万子
膝かくら出して餅のとをはろ那　東推
りちつきふ小腹支まり癪疽ゆみ　史邪
餅はきや臼も薪ゆ松くはし　之道
もち搗の手はくとやひとや小山伏　馬佛

衣配

燭りちも綾をとくとや衣くくとを　野坡
そちの手をとこのて物っ衣配り　木孝
きくねとちりいそうね新の世ろ　望翠
師走とゆ二条殿ゆきねくく　野径

歳市

年の市行をよめらん羽蔵しの　甚角
長寿ゆ唐物もなし山〻の市　永花
さしの市さはしき業やをけふ賣　しゝし
渡し場人人引とまはとしの市　奚更
我数もそれ〻に荷や年社市　麥林

節分

打まめもそのあるかさの響ゝる　亀翁
おそれそや服ふり用ふ鬼の面　荷兮
年をとる鬼よ後人や鬱ぬ豆　甚角

厄拂

そ後さしるやらふとよ人厄拂ひ　重頼
変よ家もあのりけし厄ちふひ　太祇

歳暮

一間〻ひ〻らきさせり居ゝち　巴山
歳や二十七夜のうり法軒　古圃
日のかひふ塩ふく行の鶏この那　桃隣

年忘

奥ゝ多のこ後ゝ忘ゝと年忘れ　芭蕉
引燈を消せ嵐の堂〻ひとま　丈草
ゝとれ寒し〻を鞍ゝかまし　如柳
そは切のまろ一ゝはやとゝひとま　宗因

行

行とゝの室ゝ蕉さんらをかゝき　鬼貫
ゆ〻年や戸賀造営の折紙人　寸六
引燈ゝや伊勢ゝ伊燈い棚田工　琴風
ゝく年ゝ人の系交りのゝ　沙明

年の瀬

とし〻の瀬や酒を揮せて引こなす　来山

年ぬけ瀬やこゝろ呑む拍子の抜ぬひ　甚角

流年

あの高れる高く年の淀ゐふん　素堂

なるゝ彩〻やかな陀羅尼の年の垢　甚角

蔓結

ひとり〻火の花ゆ素まり川麿ゐ那　鬼貫

素まるゝやことに女の髮の出来　同門

雪ゐ彩ゐ春まり川ゐゐ結使この首　ろく

岡見

岡見もと妹はくらひねと人の門　嵐雪

日のかゐ人まゐゐ目の引居えこの那　言水

年籠

月もなき枝のあふ〻やとし〻籠　呂波

年ゐりり鏡ぬ中ゆ居りまり　曉臺

大晦日

揉ふりむ舞妓の袖や大晦日　来山

ぬさ〻の夜ぬ鄰やゆ〻〻や三の昭　去来

ゐゐ一人ふまるこゐ年の一日ゐ船　仙化

助番や二十九日の大みそゐ　孟竹

ニ〻の数もかゐ波をゝやなりね　楚羽

年ぬ夜ゐ豆走ふゐを俵このな　裕雖

一ト志まり帰〻ゐけ〻除夜のゐ　新合

山伏や出立ゐゐ除ぬゐゐみ　正秀

寒の昏

月雪とのさらりさとしの暮　芭蕉
股引や膝くらかりまとくたつのくれ　千那
木綿買門の行燈やとしの暮　馬佛
同かくもくれしもなしや年の昏　田翠
見めまうと法とて稀なるやとし社暮　楚水
野蒲をまくしぶくせる寒雀　牧童
出かも出うそうそ鶏やとし社くれ　許六
せるるも就のかはるよ年の昏　思演
寒しの暮とやめを只金波う寒　盧水
天地は盗人ちまとやとしくれ　曲水
此くれもまと探かくしおれしとせ　秋風
寒虫の石白めくる寒雀の声　鍬下

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助同平吉蔵板俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題　春秋庵白雄房撰　小本二冊
新五百題　田喜庵獲物撰　中本二冊
新々五百題　仝撰　仝二冊
名所千題集　仝撰　仝三冊
今人東風流　洞海舎凉谷撰　一具庵一具校　仝二冊
十万句集　仝撰　仝校　仝四冊
續故人五百題　一具庵一具撰　小本二冊
類聚　八朶園寥松撰　中本二冊

俳諧新發句類聚　全撰　中本二冊
俳諧發句類題　全撰　全二冊
同　占今撰　蕪庵蟹守撰　全二冊
四季發句帳　全一冊
臼孔七五三　艸丸大人輯　中本二冊
俳諧發句新類題　六合庵万里輯
○句集之部
嵐雪句集　一称玄峰集　全二冊
其角句集　坎窩久藏撰　小本二冊
蓼太句集　全六冊

吏登句集　全一冊
巣兆句集　全一冊
完来發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集
柳居發句集
糂粉瓶　甲斐艸丸集
葛里句集　連句の集　全一冊

護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊

〇季寄之部

戀の栞　葎雪庵北二著　小本二冊

俳諧手挑燈　一名俳諧初心手引草　中本二冊

同　掌中小本　全一冊

俳諧四季名寄　季寄大成の出来且名所を附記　寸珍一冊

俳諧袖鏡　一枚揃

季寄便覽　横本一冊

俳諧通言　小本一冊

〇文之部

新編俳諧文集　あはれ字名の人の文をあつめ　全一冊

〇

俳諧變躰一覽　両面一枚揃

袖宝規　表俳諧定座変体之図
七部集その外古哲俳袖の変化あるを集め宝庫あり合せ図しるす
五俳俳袖の自立を一目に見るべし

俳諧鵲　自初編今天保迄至凡三十編

〇掌中寸珍物　編数こゝろまま付今俳集卅とあつ

掌中五百題初編　集卅初編

同　二編　集艸二編
同　三編　集艸三編
同　芭蕉發句集　集艸四編
同　其角發句集初編　集艸五編
同　二編　集艸六編
同　三編　集艸七編
同　嵐雪發句集初編　集艸八編
同　二編　集艸九編
同　乙由發句集　集艸十編
同　蓼太發句集初編　集艸十一編

同　二編　集艸十二編
同　新五百題初編　集艸十三編
同　二編　集艸十四編
同　三編　集艸十五編
同　古今撰　集艸十六編

猶追々出刻

○假名遣物目錄

万葉用字格　春登上人撰
万葉集に文字の多き分五十音の中まで悉く所位を分ち且仮名遣の正しきを紀記万葉以下古歌のうるを稽

尚古假字格　山本明清大人撰　懐中　折本一冊

今古假字格　高井八穗大人撰　全一冊

古今多くの形を合せ一目瞭然たらしめし

對照假字格　長野美波留大人撰　全一冊

上代の形

定家の形遣　新校　小本一冊

音便假字格　春登上人撰　全一冊

排花堂